佛說大身窮理

纙說人身竅理

一

人身窮理小解序

予カ今訳定スル処ノ小冊子ハ其原本文章簡約ニメ論理精詳故ニ予カ常ニ嗜タ愛スル処ノ者ニ癸ルニ我邦中邦語ヲ以テ著セル人身窮理ノ各未タ曾テ此ノ如キノ善本アルヲ見ス是レ予カ繙訳ノ為ニ時日ヲ費スコヲ企シ所以ナリ且ツ此各ヤ唯医家ノ為ノミナラス亦常人ノ為ニ著述セル者ニメ殊ニ常人ハ本論ヲ解シ得サル者多シ故ニ予自其浅陋ヲ省ミス篇中一二ノ部分ニ於テ廣ク諸各ヲ纂集メ註解ヲ加而メ其

其ノ訳文ハ皆勉テ「シーゲンベーキ」名人ノ緻辞法ニ从テ此ヲ級ルト雖モ亦何ソ能ク多クノ謬悞ナキヿヲ得ンヤ願クハ學者宜ク能クこヲ校正改革メ善本ナラシメハ予カ大幸亦何ソ此ニ過ン予今復タ別ニ茱萸各訳述ノ晦メノ辞スヘカラサル者アツテ屢タ忙閙ナルカ故ニ一々此各ノ謬悞ヲ校正スルノ暇ヲ得ス

訳者

アヰブマ書

人身窮理學小解　和蘭一千八百九年鉄行

高獨逸都　　儸說　著
和蘭　　英布蘇　訳註
備中　　緒方章洪菴　重訳

題言

第一章　人身窮理ノ學タル各人ノ見ニ從テ各々其端ヲ異スト雖モ之ヲ総フルニ唯是生活健康スル人身ノ自然ヲ明ムルニ在ルノミ（即チ此學ノ基本ナリ）

故ニ今其語意ニ従ヘハ且其ノ字宙ニ対シ人身ヲ究理学ト名ケテモ可ナリ

第二、○是故ニ此学ヲ人身ノ自然ヲ知テ疾病ヲ察セントスル徒ノ亟ニ知ラサルヘカラサル最大要緊ノ者ナリ

第三、○夫レ人身ハ本ト是レ一個ノ小天地ニメ動物ノ部類ニ属シ其体質分子一種固有ノ功ヲ具テ萬物中ノ一物ナリ

第四、○凡ソ萬物中生活ヲ具有スル者之ヲ機生体ト云機生体ト云ハ其体諸種ノ器械ヨリ合成シ其器械各一箇ノ機動ヲ具ヘ其機動相合メ以テ其全体ヲ生成営養スル者ナリ

(注)凡ソ機生体ハ其体質不同ノ者ヨリ成リ無機生体ハ具質同種ノ者ヨリ成ル譬ヘハ今大理石ヲ取リテ是ヲ破砕スルニ其分々大小形状各々相違フト雖モ具質ニ至テハ一モ相異ル者ナク機生体ハ之ヲ剖割スルニ分々皆相同シカラス又機生体ハ内部ヨリ生養シ無機生体ハ外部ヨリ増育スル是機生死機生両体ノ区分ノ大ナル者ナリ

第四、下

〇是故ニ機生体ノ性ハ一個ノ力ヨリ生ス其力タル体質中一分モ離ルヘカラサル者ニメ一モ之ヲ離ルレハ機生体タルコヲ得ス而メ其力ノ用タル機生体ノ全質ヲ メノ常ニ不断ノ変動ヲ生セシム

第五、

〇凡ソ生活体ニ二種ノ別アリ其一ヲ動物ト云ヒ一ヲ植物ト云フ夫レ万物覚機（ゲヲーリアード）ニ感動シ随意ニ挙動シ口腹ヲ以自在ニ其体質ヲ栄養シ不変ノ陰具ヲ有テ清気ヲ吸ハスル但シ植物ハ之ヲ吐出ス）ハ是レ動物ノ植物ト異ル所以ノ徴ナリ

（注）夫レ人ト植物トハ其別固リ著大ニシテ人ト植物トノ別ニ至テハ其界限甚タ定メ難シ（古氏説ニ言植虫）「ソーヘイテン」ノ如キ植物性動物原名（プラントデーレン）ヒ

然レ𪜈其別自ラ昭々タリ今其体ヲ合成スル原質ヲ以テ比較スルニ其原質ノ数動物ニ於テハ植物ヨリ殺ヲ以テ之ヲ考フ（ママ）ルニ体ヲ以テ比較スルニ動物ニ於テハ其凝体ノ量植物ヨリ少ク且ツ植物ニ於テハ其合成原質ノ数少シト雖モ動物ニ比スルニ其揮発少シ是レ動物体ニ於テ

人ト植物戦ノ別其限界ヲ為ノ比ニ非ズ

ハ気状ノ窒質其多分ニ居リ植物体ニ於テハ
固性ノ炭質其基礎ヲ為セハ之ニ発シ其動
植二物体ノ界限ヲ定ムヘキ最大較著ノ徴候
ハ元百ノ動物上ニ入ヨリ下植物性動物ニ至
ル迄有セサルモノナキ所ノ一個ノ空洞分註即腸
胃ナリ其空洞内ニハ飲食消化ノ機能在テメ
ノ内面ニ吸収ノ機能ヲ具フ其吸収ノ力之ヲ
体ノ外面ニ於ケルカニ比スルニ最モ強ク其
機能ヨリ全体ノ栄養ヲ為ス植物ニ在テハ此
機能ヲ体ノ外面ニ具フ而メ此空洞ハ動体ニ在
テハ最大有用ノ部ニメ其動機尤モ強ク全体
ノ死メ既ニ心臓ノ鼓動ノ絶ユル後モ尚其蠕
動機ヲ保續ス

○人身窮理ノ学ニ二種、別サリ其一ヲ普通ノ学
ト云ヒ其一ヲ各区別ノ学ト云フ夫人ノ体タ
ル凝流ニ質ヨリ合成スル者ニメ其各部ノ運化
機能ハ一種ノカヨリ発ス其実質及ヒカヲ考究
スルヲレヲ普通ノ学ト云ヒ各部ノ機能ヲ考究
スルヲレヲ各区ノ学ト云フ

題言終ノ

第一章

夫人ハ他ノ乳養ノ動物ト其類ヲ同フスト雖モ
其他ニ殊ナル所以ハ固ヨリ其能義理ヲ辨シ言
語ヲナスニ在加之尚其較著ノ別少カラス喩ヘ
ハ全体製造ノ精密ニメ柔挽ナルト身体外面ノ
滑沢ニメ軟嫩ナルト頭蓋骨ノ大ナルト甚タ顔
面及ヒ咀嚼器械ノ比ニ適クルト顔面ノ平坦ナ
ルト鼻ノ隆起セルト脳ノ大之ヲ神経ニ比スル
ニ稍大ナルト後脳ニ比スルニ前脳ノ適度ニ大
ナル小腸胃ノ製造肉食蔬食共ニ相適当セルト

髖骨、即チ小腹下衣ノ骨囲ナリ（ベッケン）髖骨平凾ニメ短矮腸骨及ニ相関ケテ恥骨合縫ノ短キト女子ニ在テハ其陰具ノ製造及ヒ機能他ニ異ルト（即チ子宮ノ淫海綿様質處女膜月経等ノ類）男子ニ在テハ蔓精ヲ為スト男女倶ニ媾合ノ時ヲ定メサルト其他尚両手ノ挙動自在ナルトヲ行スルヿヲ得ルノ美是レナリ

第二章

成人云人ハ四足ヲ以テ歩マサルカユヘニ其歩行健固ナラス危害ヤカラス且ツ竪立スルニ由テ発スルノ病ニ罹リ易シ故ニ四足行ハ乳養動物ノ本性ナリト発レ圧人身ノ製造タル一個別種ニ付ルカ為ニ能ク其不足ヲ給補スル処較著ナル者ハ即チ頸頚接続ノ状ト脊推ノ製造ト下肢ノ長大ニメ其筋骨軟帯上肢ヨリ強固ナルト肘臂骨ノ内ニ撓ムト胸腔ノ狭短ニメ前ニ張レルト臆骨ノ手凾ナルト尾骶骨ノ内部ニ曲レルト全身重心ノ両股骨頭ノ中間ニ正ク向フト諸関節ノ製造ト胸腔及ヒ腹腔ノ内臓ノ状ト皆能ク竪立スル者ニ適当又唯々其竪立ノ身体ニ変ヲ為ス者ハ歩壮ノ後ニ於テ全身ノ長朝毎ニ晩ヨリ大ナ

按ニ人ノ胸腔狭短ナラス今原文ニ従テ訳又後考ヲ俟ツ

ルヿヲ得ル者ノミ

注 其体長ノ変ハ殊ニ脊骨ノ每椎ヲ相接続スル較骨ノ伸長蹙縮ニ由ル者ナリ

第三章

夫レ人身ノ製造ハ人々各相著シト雖モ亦以レ三種ノ別アリ其一年齢ニ由ル者其二男女ニ由ルモノ其三居地ニ由ル者是ナリ其初メノ二種ニ於テハ予將ニ後ニ詳ニ以ヲ證説セントス故ニ今以ニ贅セス其居地ニ由テ形状色次ノ異ルヲ以テ人ノ種族ヲ定メントスル寸ハ謬誤ヲ為スヿ少カラス何トナレハ其地産地ニ非スト雖モ其居ルヿ久シケレハ終ニ能ク相移変スル者ナレハナリ

第四章

人身ノ原質タル以ヲ分析術ニ由テ考覈スルニ数種アリ曰ク石灰曰ク鉄曰ク酸質曰ク硝石質按ニ是即テ窒質ノ一名ヲ曰ク燐曰ク炭質曰ク水質是ナリ以諸原質ハ体中各部ノ異ルニ従テ其給合亦千差萬端ナリ

註 窒質ハ名硝欲原基窒甸名ノ人体中ニ於テスアクチユムヒ過分ヲ為スヿハ予既ニ題言中ニ於テ之ヲ説

ケリ温質モ亦動物体中ニ於テ缺クヘカラサル
ナリ緊要ノ原質ナリ

第五章

身体ノ部分之ヲ大別メ二トス曰ク流体曰ク凝体

第六章

流体ハ即チ人身中諸液ノ総名ニメ此ニ三種ノ別アリ一ヲ血液ト云ヒ一ヲ未塾液ト云ヒ一ヲ分離液ト云フ凡ソ人身中ニ在テハ流体最モ其多分ヲ為ス者ナリ按スルニ李奢蘭度曰百二十シムル寸ハ十七日許ノ尸屍ヲ取テ竈中ニ乾固セ許トナル以テ流体ノ多キヲ其重減メ十二ヲ知ルヘシ

第七章

凝体ハ是レ其質繊維質水液及ヒ膠質揮発香氣質ヨリ合成ス

(注)流体ハ其成分凝体ト相違フコナク唯其合成ノ状ノ互ニ相違フノミ凡ソ凝流二体ノ別ハ其質ノ剛柔ヲ以テハ成シ難シトス諭ヘハ腎ノ脂肪ノ如キハ其質脳髄ニ比スルニ甚タ硬固ナリ然レモ誰レカ能ク脳髄ヲ流体トシテ脂肪ヲ凝体トスル者アランコレ亦ヘニ予ハ人身ヲ分チ既機生体凝体ト未機生体流体トス

見レ流体ハ未タ十分ノ器械ナルヿヲ得サレ
ハナリ

第八章

凡ソ動物体及ヒ総テ機生体ノ基形ヲ為ス者纖
維ナリ其纖維ヲ小枝（ブラーチス）トシテ相排列メ一平面ヲ為ス者之
ヲ膜（註）動物体ノ成分相合メ凝体ヲ為スヤ其混合
カト引カトヲ以テ互ニ相連接シ以テ一種ノ
定形ヲ為スヿ猶金属資（ミネラル）始ノ如シ其定形ハ即
纖維ニ此ニ故ニ纖維ハ諸機生体（金石ト水之ニ属ス）ノ基礎ニ

第九章

其小枝活物膠（ゲルレートラーム）ニ由テ迭ニ相接着合併シ以テ蜂
窩状組織ヲ為ス此質ハ全身各部ニ在テ一種ノ
液ヲ其中ニ含畜シ其状恰モ蜂窩ノ状ノ如シ故
ニ此名ヲ得ル晩近之ニ粘液組織ノ名ヲ命ゼルハ反テ拙シ

第十章

蜂窩状組織ハ実ニ見レ全身ノ基礎ヲ為ス者ニ
メ体中各部ノ維持皆此ニ由テサルヿナシ

第十一章

其蜂窩状組織ハ人ニ於テハ他ノ乳養動物ニ比

スルニ最モ柔軟柔弱ナルモノアリ然レドモ其疎密強弱ハ各人各部ノ異ナルニ従テ相同シカラス

第十二章

全身ノ蜂窩状組織ハ皆倶ニ一個ノ張力ヲ以テ具フ此力ハ死後ニ於テモ仍見ルコヲ得ルカユヘニ亦之ヲ死力（此ヲ死体ニ於テ見ルカ故ニ死体ニ属スルモノトイフカラクト）ト名ク然レドモ此力活体ニ於テハ栄養ノ為ニ較著ノ運動ヲ起スヿ敢テ死体ニ於ルカ如キ此ニアラス故ニ又此ヲ生活体ノ収縮力（サーメンテツケンテカラクト）ト名ク

第十三章

蜂窩状組織ハ全身中何レノ部ニ於テモ必ス液ヲ其中ニ含畜スルモノニシテ多クハ諸部ニ在テ水様ノ糞気若クハ脂肪ヲ以テ充盈シ骨中ニ在テハ髄液ヲ含ミ眼内ニ在テハ硝子液ヲ畜フ

第十四章

凡ソ蜂窠状組織ハ流体ノ変メ凝体トナル其始ナル者ニメ其成分ノ結合混和相異ルニ従テ以テ各々相異ル諸器械ノ基礎トナル即チ皮革、脉管、剛骨、軟骨、軟革、筋、腱、神経、内臓、腺、等皆此ヲ基礎トメ各自ニ適宜ノ組織ヲ得以テ外膜ニ被包セ

ラル

第十五章

凡ソ全身諸器械皆各自ニ運動ヲ以テ生活ヲ為ス其原一個ノ力ヨリ生ス其力ヲ生活力ト云フ

第十六章

夫レ生活力ハ是レ普通ノ自発力ト全ク異ル一種ノ力ナル乎或ハ其原基ヲ合質即チ機生体ヲ合質スルノ究質ノ混合形成ノ状ニ由テ変メ一種ノ力トナリ発スル者乎或ハ一種ノ生活力原基ナル者アル乎其原基ハ是レ酸質乎神経乎永タ定説アルナシ

註 予カ生活力略説アリ今記メ爰ニ賛ス○夫レ生活基原ナル者ハ是レ体質固有ノ混合ト其混合ニ由テ以テ発スル処ノ機ニ関係スル者ニメ須臾モ其中ニ離ルヘカラサル者ナリ故ニ生活力ハ是レ其質ノ性ニメ即又機ノ性ナリ由テ以テ知ル今諸体生活ノ起因ハ是レテールストフ混合ノ中ニ発スル者ナルヲ焚ルニ其混合ハ又ハ父母ノ生活ヨリ発スル者ニメ父母ノ生活ハ亦其先祖ヨリ傳来ス

是故ニ生活ノ原ニ游ヲ其原ヲ極メント欲スル
者ハ唯々之ヲ造物者ニ畀スルノ外ナシ○且ツ
生活ハ必ス其機ノ度ニ従テ相伴ル者ナリ故ニ
其機念々具足スレハ其生活亦念々具足ス喩ヘ
ハ「ホレーベン」ノ如キハ其機草木ニ比スルニ稍
々具足セルカユヘニ其生活モ亦草木ヨリ具足
セリ人身ハ其機ノ尤モ大ニ具足セル者ナリ故ニ
其生活ノ大ニ具足セルヿ敢テ他物ノ比スヘキ
ニアラス

第十七章

凡ソ生活ノ徴ノ最モ普通ナル者ハ外物ノ感觸
ニ感應スルノ性ナル者是ナリ此性之ヲ発動性
ト名ク

註按スルニ此発動性ナル者ハ即チ是觉覺性
ト相合致スル者ニメ実ニ之ヲ太ルノ外敢テ
別ニ発動性ト為ヘキ者ナシ即チ諸機生体皆
能ク外物ノ抵觸ヲ感覚シ其抵觸ノ度ニ應メ
コレニ抵抗スルヿヲ得ルモ觉覺性ナリ又能
ク其栄養ニ適スル物質ヲ資テ以テ生成
化育スルヿヲ得ルモ觉覺性ナリ此觉覺性

ナル者ハ各々機生体実質ノ異ルニ従テ各々相
同シカラス即或ハ常ニ外物ノ抵觸ヲ唯々其抵
觸スル部分ニノミ感覚スルノ体アリ或ハ其抵
觸物ノ性ト抵觸セラルヽ部分ノ性トニ従テ或
ハ唯具一部ニ感覚シ或ハ其感動ヲ全体ニ及ホ
スノ体アリ是故ニ此觸覚性ヲ二種ニ分ケ一ヲ
隠的ノ觸覚性ト云ヒ一ヲ顕的ノ觸覚性ト云フ
隠的ノ觸覚性ハ諸機生体人ヨリ草木ニ至ル迫
皆一モ此ヲ固有セサル者ナク顕的ノ者ハ唯其
抵觸ヲ知覚スヘキ一個ノ中点ヲ具フルノ機生
体ニノミ固有ノ物トス而メ其中点ト名ル所ノ
者ハ即所謂頭脳ナル者ニメ偶々此レナキ動物
ニ於テハ必ス此レニ代ルノ器械アル者ノナル
ナリ

第十八章

夫レ体中ノ諸液モ亦是機生体ナル者ニノメ血液
モ亦生活力ヲ備具スル者歟将タ生活力ハ唯々
凝体ニノミ固有ニメ且ツ十分具足ノ動物（ホルコー
ンスデーレン）ニ於テハ唯神経質ノミヨリ発スルモノ
歟

注 今生活力ハ機ヨリ発スルトニフヲ原トシテ考ル寸ハ其液ニ生活力ナキ丁昭々タリ発レニ因今夫胎児ヲ見ルニ其始メ唯是レ一個ノ液ノミ是ニ由テ以ヲ観レハ液モ亦生活力有スル者乎憶フニ夫レ「テールストフ」男子ニ在テモ女子ニ在テモ唯是一個ノ液ナレハ固リ生活力ノアルヘキニ非スト雖モ其男精ト女精ハ卵巣内ノ小胞中ニ在リ女精ト和合ニ由テ直ニ一個ノ機ヲ発スル丁ハ実ニ海塩ノ酸蒸気ト硫砂揮発気ノ互ニ合和ノ直ニ結芝体即是レヲ為スカ如キ者ナラン受娠ノ初日ニ於テハ其胎ノ状殆ト唯一個ノ粘液ノ如シト雖モ已ニ其機ノ発生セルヿ其中ニ較乎タル動点ノ見ルヽヲ以テ知ルヘシ

第十九章

生活力ノ現象ハ其力ノ発動スル器械ノ異ルト其力ヲシテ発動セシムル抵觸ノ不同ナルヲ以テ種々一般ナラス

第二十章

凡ソ生活力ノ諸器械ニ発現スルヤ其器械ノ異

ルニ応シテ千状万態各々相差フ者ハ之ヲ総ル
ニ其器械合有スル処ノ実質中ニ交錯セル無機
生質多少アルニ由ル而メ其変機生質ノ交錯念
（即チ生活カヲ具有セサル負実ヲ以テ）
ク欠キ者ハ其機動必ス益々敏鋭ナル者ナリ○
其器械製造ノ異ルニ応メ相差フ処ノ生活カ機
動ニ較著ナル者二種アリ其一ハ識確ノ能ク外
物ノ感觸ニ応メ直ニ変換スルカニメ「華尓列児」
人名カ発明スル処ノ觸動性ナリ是レ唯筋識確ノ
固有ノカナルカユヘニ此ヲ筋觸動性ト名ク其
一ハ外感ニ応メ変動シ以テ思慮分別ヲ神識中ニ
発セシムルノカニメ古人ノ謂ニ感覚性ト名名
シ者ナリ是レ唯神圣ニ固有ノカナルカユヘニ
之ヲ神圣觸動性ト名ク其他身体各部ニ於ケル
生活カ機動此両性ヲ以テ解得シ難キ者多シ扶
等ハ又各部固有ノ生活カ現象トセサルヲ得
ス「蒲律綿抜苦」名曽テ人身資生ノ生活カ機動ヲ
作メ一種ノ形成カトセリ能ク臆断ヲ免ル、ト
云ヘシ矣ヒ其蜂窠状組織固有ノ觸動性及ヒ起
脈カ「ヲップヌウェルレン　デフフルモーゲン」等ヲ謂ニ取用スルカ如キ
ハ切要ノ吏ニ非ス

第二十一章

吾儕経験ニ由テ以テ考ルニ抵網ハ実ニ見レ生
活力機動ノ起因ヲ為ス者ニ乃其機動ヲ発起ス
ルノ多次ハ常ニ其抵網ノ度ノ多次ニ応スル者
ナリ故ニ其抵網スルヿ適宜ナレハ能ク生活力
ヲ機動ヲメ強カラシメ其抵網スルヿ過度ナレ
ハ却テ其カヲ奪フ又身体各部互ニ相感応スル
処アツテ一部ノ抵網能ク其部ノ機動ヲ発セシ
ムルノミナラス猶其機動ヲ他部ニ発セシメ或
ハ両部同時ニ異種ノ抵網ヲ受テ機動ヲ同時ニ
発スルヿナク一部ノ機動十分ニ発スル後ニイ
タツテ始テ他ノ一部ニ之ヲ発スル者アリ此迭
ニ感応スルノ性ヲ合致性ト云ヒ又分興性ト云
フ

第二十二章

其抵網ノ生活体中ニ働クト其体ノ此ニ抗衝ス
ルトヨリメ体中諸種ノ機動能ナル者生ス

第二十三章

古人曾テ此身体機能ヲ分テ四種トセリ曰ク動
物性機能神識ノ感覚肢体ノ挙動是ニ属ス原名
「アニーキ、フルリクチング」曰ク生活機能血液ノ循環ヲレニ属ス原名「ヴヘニスフルリナヂング」曰ク自

突機能「養化育ノ機動是レニ係ス原名曰ク分種
ナクシテルレ「キフルリフチング」
機能男女構合ニ関ル機能是レニ係ス
原名ケスラクトフルリフチング是レナリ
突レモ今之ヲ考ニ其区別ニ於テモ其名目ヲ於
テモ共ニ穏当ナラス今時ハ人身ノ諸機能ヲ統
テ唯二種ニ分テ一ヲ機生体タラシムルノ機能
トス云ヒ一ヲ動物体タラシムルノ機能ト云

第二十四章

凡ソ体中諸機能皆善ク易ラカニメ間断ナク吹
シモ鬱滞スルコトナキ者之ヲ真ノ健康ト名ク

第二十五章

夫レ人ノ体タル地トメ住ムコトヲ得サルノ処ナ
ク食トメ喰フコトヲ得サルノ者ナシ此其体能ク
此レニ納ルヽノ物ニ応メ適宜ニソノ機ヲ変ス
ル性ヲ有スルニ由ル其変スルノ時ニ当テヤ十
分健康ノ状ヨリ離レサルニ非スト雖モ諸機能
ノ衡平ニ至テハ敢テ差異スルコトナシ是故ニタ
ヽ健康ト名クル者ハ其意味甚タ廣シ即チ全身諸
器ノ機能々ク互ニ合致メ過不及ナキ者ハ皆此
名ヲ取ルコトヲ得ル唯各々諸機能衡平ノ齟齬スル
者ノミヲヲ疾病ト名クノ

第二十六章

是故ニ各人各自ニ相異ナル固有ノ健康アリ其年齢男女習慣ノ異ルニ従フ者ハ固ヨリ十全ノ健康ヲ離レサルニ非スト雖モ亦敢テ疾病ノ名ヲ余スヘキ者ニ非ス

第二十七章

諸器ノ張力発動性及ヒ諸液ノ性状ヲ人々各々相差フ此ヲ稟質ト名ク古人曾テ此稟質ヲ分テ四種トス其名当ラスト雖モ其別実験ニ出ツ故ニ今仍之ヲ取用ス即チ其一ヲ多血質ト云フ二ヲ胆液質ト云其三ヲ粘液質ト云其四ヲ黒胆液質ト云フ

梅氏私病理論曰多血質ノ人ハ其発動ノ度高クシテ筋肉能ク軟薄ニシテ液質過多血行速ニシテ胆液質ノ人ハ発動性ノ度高シテ多クハ強剛ニシテ緊硬ナリ胆液ノ稟質過多ニシテ粘液質ノ人ハ発動性微ニシテ其力弱クシテ能ク疲後ニシテ水液過多ニシテ黒胆液質ノ人ハ発動性微ニシテ其力強クシテ筋肉緊硬ニシテ流体重稟稠密抗衝力徐緩ニシテ力アリ

第二十八章

胆液質ト云ハ其胆液ノ性人々相差フ者此ヲ稟性ト名ク

(注)四質ハ唯是稟質大概ノ区別ナルノミ実ニ純粋ノ多血質及ヒ純粋ノ胆液質ト名クヘキ者ハ敢テ此アルコトナシ若シ精詳ニ区別セントスルオハ其差別無数不尽ナラサルコトヲ得ス

論使人身為動物体之機能第一

凡ソ人身ヲノ動物タラシムルノ機能ハ二種ニ為ル即チ識覚（オントソーオルデン）ト挙動（ベヴェーグング）トナリ

第一回　識覚総論

第二十九章　（原本第三十六章）

夫レ神識ト体質トヱニ相関応スルヿヲ得ル其媒ヲ為ス者ハ神経質ナル者ニヌ此質ヤ一種ノカヲ有ス其カタル能ク外物ノ抵觸ニ応ヌ其質中ニ変化ヲ起シ以テ神識ニ識覚ヲ発セシム此カヲ神経ノ触動性ト名ク古人之（ヲ）感覚性ト名ル

（通被（ツーヘーデ）　疎被（ウンターヘーデ）　脳膜（ヒルンハウト）　軟膜（ヴァイヒハウト））

者アリト雖モ未タ当レリトセス

第三十章

神経質トハ夫レ何ヲカヱフ頭脳脊髄諸神経ノ総稱ナリ

第三十一章　第三十八章上

頭脳ハ頭蓋骨内ノ腔間ニ在リ頭蓋骨ハ其外面毛髪ヲ叢生スル通被ヲ以テスルノ外腱様膜ト骨膜トヲ以テ被ハレ其質八個ノ骨ヨリ合成スル八個骨トハ其一前頭骨其二両個ノ頂骨（シェイテル）其三後頭骨其四（ヒンターハウプツ）両個ノ顳顬骨（シュッペンベーン）其五両個ノ蝶形骨（ケッペルベーン）其六鋤骨（ピフラー）是ナ

リ此諸骨胎児ノ始ニ在テハ皆軟骨狀ノ膜ニメ
後チ漸ク硬固トナリ已ニ産出スルノ時ニ至テ
ハ殆ト皆硬骨トナリ其殘ル処唯僅カニ存スル之
ヲ顱會ト云其諸骨ノ迭ニ合着スルヤ最密ニメ
次シモ動揺スヘカラス多クハ縫合狀ニ相接着
シ其骨質各部ニ許多ノ孔アツテ神圣血脉此ニ
通ス

第三十二章 同章下

頭蓋骨内面ハ剛膜ヲ次テ被ハル此膜ハ強剛
ニメ血脉布蔓セル二層ノ膜ニ成ル其外膜ハ血
脉ト蜂窠狀質トニ由テ周ク頭蓋骨内面ニ接着
シ其内膜ハ處々ニ於テ外膜ト相離レ延テ次テ
鎌狀挺ト後脳前ノ空隙（ハックト）脳間ノ諸竇（ブーニュス）トヲ形成ス
此後脳膜内ニ在テ脳ヲ蓋フ所ノ膜ハ此ヲ蜘
蛛絲樣膜（或ハ訳蛛網膜）ト名ク此膜ハ固ヨリ敏ク脳ヲ被包ス
ト雖モ脳ノ皺襞間ニ入ルコトナク其質神圣ナク
亦血脉ナシ 其脳ニ最モ密通ヌ外面ノ凹凸ニ
従セ所トメ被ハサルコトナキノ膜ハ此ヲ軟脳膜
トナツケ或ハ脉絡膜ト名ク（按ニ薄脳膜）其質柔致（ソフトキ）脆
多ノ血脉布蔓シ以テ血ヲ脳ニ送輸センムルコト

ヲ為ス

第三十三章

脳ニ二個ノ別アリ一ヲ大脳ト云ヒ二ヲ小脳云フ此両脳共ニ二種ノ実質ヨリ成ル曰ク灰白質曰ク白質是レナリ又其大脳ノ後部ト小脳トニ於テハ其両質ノ間ニ黄色様ノ実質アリ凡ソ此大脳ニ在テハ胼胝様体ヲ以テ之ヲ繋持シ小脳ニ在テハ其中部（ミッテルデル）ニ由テ自ラ合着セリ大脳ト小脳トノ間ニハ「テントリュム」ト名クル者アツテ之ヲ隔テ其両間ノ表面ニハ種々ノ皺襞アリテ凹凸ヲ為ス大脳ハ許多ノ部分整列ス其部分ノ主用ハ古来未タ之ヲ詳ニスル者ナシ

第三十四章

脳ノ下面大脳ノ後部小脳ノ前部其両脳ノ白髄質迄ニ相接スル処ノ所ニ輸様隆起（リンクホルミフォーベヘード）ナル者ト脊椎ノ始原トアリ此脊髄ノ始原之ヲ延髄ト名ク

第三十五章

諸動物中ニ於テ人ハ其脳神経ノ大サニ比スルニ脳ノ下面大脳ノ後部小脳ノ前部其両脳ノ白髄最モ大ニヌ且ツ其大脳ノ小脳ヨリ大ナル丁他

挍ス許多ノ部分ハ即チ伽條体視神経篇ハ松ヤニノ尾筆ホナリ為解易可参攷

ノ動物ニ比スルニ尤モ甚シ

第三十六章

腦ハ頸動脈ト脊推動脈トヨリ全身血液ノ十分一許ヲ受ケ其還流ノ血ハ諸竇（即チ是腦中ノ靜血脈ナリ）ニ由テ內部ノ頸靜脈ト小枝ノ脊推靜脈トニ收ル

○又腦中ニ於テモ許多ノ吸收管（試者曰ク吸呑ニ似タリ）アルコトヲ見ル

第三十七章

腦ニ二種ノ運動アリ其一ハ動脈ノ搏動ヨリ發スル者ニシテ其動微ク其一ハ呼吸ニ關係スル者ニシテ其動著ク上下ニ動搖スル者ナリ（試ニ「アリエメンバック」ト曰ク「呼氣ニハ上騰シ吸氣ニハ下垂ス」）

第三十八章

脊推ハ延髓ノ延長セル者ニシテ後頭骨ノ大孔ヨリ出テ脊骨內ノ空間ニ充塡シ其質白髓質ト灰白質トヨリ成リ此髓ニ在テハ灰白質內部ニ在テ白髓質外部ニ位置シ其外面ニハ腦ノ諸膜ニ等キ膜ヲ以テ被包シ其実体腰部ノ第一二髓間ニ終リ此部ヨリ下ハ唯神圣ノ會束セル者ニシテ馬尾狀ヲナス

第三十九章

神圣ハ脳ト脊推トヨリ出ル者ニ乃白色柔軟ノ線條ナリ凡ソ体中単質ノ蜂窠状組織(按ニ是神圣血脉ノ交錯セサル者ヲ云)表被軟骨々膜骨髄腱帯剛脳膜蜘蛛糸様膜胸腹ノ通膜吸収管胞衣等ヲ除クノ外ハ諸部皆之ヲ以テ其ヘサルナシ然レニ其枝数ノ多次ト大小トニ至テハ各部異ルニ従テ同ナラス

第四十章

神圣ノ脳ト脊推トヨリ出ルヤ両々相対シ其始メ白髄質ノ微細ナル線條許多相聚テ會束シ以テ神圣大幹ヲ作リ其外囲ニ軟脳膜ヨリ展延セル莢膜ヲ被リ其頭益骨下面及ヒ脊骨推間ノ孔ヨリ出ル処ニ於テハ剛脳膜ノ展延セル者ヨリ其莢膜ヲ得ルニ由ル○凡ソ神圣ノ原始ト末端ト古来種々ノ異論アリト雖モ実ニ如何ノ状ヲ為スヲ未タ確乎タル證候ナシ

第四十一章

神経ノ表面ニハ「スヒラールスウェーセ」ノ横紋有テ血絡布蔓ス其血脉ノ蔓延スルヤ柔脆ノ網状

ブリチンバッグ白ク神圣外面ニハ許多ノ皺襞アリテ見條理様ヲ為ス其状気管ニ似タルカコトシ

第甲六、第四十七、合解

ヲナシテ其末梢皆神圣ノ実質ヲナセル線條間
ニ終ル

第四十二章

凡ソ神圣ノ蔓延スルヤ幹ヨリ分レテ枝トナリ
枝又タ分レテ朶トナルト恰モ草木ノ状ノ如シ
然ルニ其岐分スルヤ真ニ真ノ枝ヲ為スニ非ス
メ其幹ハ唯々枝ノ會束メ蜂窠状組織ニ由テ互
ニ相結着サルル者ナシ

第四十三章

神圣ノ循行スルヤ身体各部ニ於テ數條相襄合

再按之ニ

ブリテンジグ曰神圣叢ハ神圣外部ニ北テ組成相襄結スル者ト又曰神圣ハ節貝組織微密ニ帯仁灰白貝周洋ナラスト云ヒ又始メニ神圣叢ノ散脱ヲ云ヒ貝用ヲ云ヘル矛盾ニ神圣叢ノ用ヲ論スル所以ヲ云ヘル貝ニ物雷ト云ヘルモノカ

メ結着シ以テ神圣叢ヲ形成ス（ヒトニューログリア）神経節ハ古来或ハ之ヲ各部ニ於ケル小腦ナリトシ其用不随意ノ諸器ニ貝ル神圣ト為メ神識ニ係ラサラシムルノヲ生スル者ニトナレハ意識ニ從フ諸筋モ神圣節ヨリ出ル神圣ヲ貝ル者アレハニ或ハ又貝レ諸種ノ神圣ヲ合体メ一種ノ用ヲ為サシムルノヲ主ル者ナリトスルノ説アリト雖モ是唯諸種ノ神圣ヨリ成ル者ニノミ云フヘカラス貝レ草種ノ神経節ハ唯一個ノ神

圣ヨリ成ル者ナレハ
第四十四章
天レ体ト神識トノ合和ハ固ヨリ神圣質ノ在ル
ニ由ルト論ナシ其ホレニ由ルヤ神識能ク諸筋
ニ挙動ヲ発セシムルノミナラス猶外感ニ由テ
神圣中ニ発スル処ノ変動ヲ知覚スルヿヲ得ル
第四十五章
凡ソ人ノ思慮分別ヲナスヤ其力即神将ニ器械
ノ機力ヨリ資始スル者乎或ハ別ニ一個神識ナ
ル者アツテ唯生活ノ間其器械ト結合セル者乎
未タ人身疱理ノ学ヲ以テ判断スルヿヲ得ス
第四十六章
吾儕今脳ヲ以テ此ヲ神圣質中ノ中在トシ此ヲ
外来諸感ノ會湊スル所トシ神識動ノ発出スル
所トシ以テ之ヲ総統ノ識具ト名ク
第四十七章
脳中ニ於テ神識ノ舎スル処ハ古来或ハ之ヲ脐
脈体ミゆトシ或ハ粘液腺ナリトシ或ハ小脳ナリ
トシ或ハシケーテワン」ト也トシ或ハ輪様隆起
也トシ或ハ死後ニ脳ノ空隙間ニ於テ見ル所ノ

流動物トニ止ト虫ヒ未タ確乎タル明説ノ証スヘキナシ

第四十八章

識覚ト挙動トハ共ニ固ヨリ神圣質ヨリ発スルカ故ニ亦識覚スル毎ニ神圣質ノ抗衝ニ由テ適宜相互ニスルノ運動ナル者起ル神圣ノ分典性ハ即チ此レニ由ル者ナリ

第四十九章

神経ノ機動ハ或ハ之ヲ其質ノ顫動ニ由ルトシ或ハ其質ノ率縮ニ由ルトシ或ハ脳中ニ分離サレテ其質中ニ充盈セル液ニ由ルトス近世「ヒュムホルト」及ヒ「リッテル」ス共ニ「ガルハニノ」試験ニ由テ発明スル処ノ新論ニ由ルニ其液ニ在ル一凝ナキニ似タリ

第五十章

夫レ識覚ト挙動トハ共ニ是レ神圣ノ機用タリト雖モ疾病ニ由テハ偶々一個ノ機用挙動若ハ識覚ヲ失フアルモ仍他ノ機用挙動若ハ識覚ニ変ヲ生セサルアルカ故ニ或ハ識覚ハ神経ノ体質ヨリ生シ挙動ハ其被膜ヨリ生ストスフ

両説共ニ拠アルニアラス

(注)夫レ神経ノ莢膜ハ本是脳膜ノ展延スル者ナレハ其質固ヨリ強硬何ソ能ク意識ノ感動ヲヨク全身各部ニ達セシムルカ如キ迅速精微ノ機用ヲ為スヲ得ン唯其用脳ト神経トノ防禦ヲ為スニ足ルノミ　憶フニ意識ノ感動ヲヨメ全身各部ニ達セシムルハ是レ其髄質ノ顫動若クハ挛縮ノ勢ヒニ出ル者ナシ

第五十一章
神経ノ筋ニ運動ヲ発セシムルノカハ唯脳ニ関係スルノミナラス尚其神経ニ絡ヘル血管ノ夥多ナルニ由ル故ニ其体質製造ノ十分具足セサル生類ニ於テハ其力愈々強クヨク人ハ其力尤モ弱シ

(注)憶フニ夫レ脳ノ扶助ナク筋ニ運動ヲ発起スルノ神経力ハ即チ是レ不随意ノ運動ヲ為ス者ニヨク実ニ随意ノ運動ハ脳ノ扶助アルニ非レハ発スルヿ能ハサル者ナリ

第二回　論外識

第五十二章 原本第五十八、

神経觸動性ハ体中部分ノ種々相異ルニ随テ種々異同アリ其種々ニ見ワル、者ハ外識トス

其外識ニ関ル各個ノ器具ハ能ク神経ヲシテ各個ノ知覚ヲ為サシムルヿヲ得ルノミナラス能ク動物ヲシテ他万物ト殊ナル所以ノ性質ヲ得セシムルヿヲ得ル故ニ外識ハ唯々五神ニ止ルトセス

第五十三章

其外識ノ最モ普通ニシテ全身ニ添満セル者ハ知覚ナリ知覚固ヨリ神経ノ能ク外物ニ感応シテ変ヲ其中ニ起シ以テ神識ニ外物ノ性状ヲ告達スルノ機動タリト雖モ諸神経ノ触動性皆能ク然ルヿヲ得ル者ニ非ス唯皮能ク其神経ヲシテ其機動ヲ発セシムルヿヲ得ル故ニ知覚ノ器械ハ皮ナリ而シテ其指頭ニ於ルモノハ殊ニ優レリ

固夫レ知覚ハ広ク全身ニ布満シテ及ハサル所ナキカ故ニ身体保護ノ用ニ於ケル諸外識中ニ於テ最モ卓絶セルモノニシテ実ニ見レ諸般外識ノ原基タル者ニ何ソヤ夫レ眼耳鼻舌各

々其発動性ニ於ケルヤ相違フト雖モ視聴覊
味ヲ為スニ至テハ原ト唯是一個ノ知覚ナル
者ニメ其器械製造ノ各自ニ相違フヨリメ其
現ワル、処ノ用ノ互ニ相異ルノミナレハ、

第五十四章

皮ハ身體ノ全表ヲ被覆セル者ニメ其質三襲ヨ
リ成ル其一ヲ表被ト云ヒ其ニヲ「マルピキアー
ンセ」粘液体ト云ヒ其三ヲ「チョン」(一名神圣皮)

第五十五章

表被ハ身体ノ最外表ニ在テ大気ニ暴触シ其質
薄ク稍透明(オルニアクチー)ニメ血絡神圣共ニ此レアルヿナク
其内面無数ノ細線條アリテ「マルピキアーンセ」
粘液体ト共ニ華ニ固着セリ此モノヤ胎児ニ於テ
之ヲ見ルニ既ニ姙後三月ノ時ヨリ形成スル者
ニメ且ツ動物植物共ニ此ヲ有セサル者ナシ其
用タル殊ニ其下ニ有ル処ノ華ニ保護ヲ與フル
ニ在リ

(注)憶フニ表被ハ殆ト是レ機生体ノ中ニ列シ
難キ者ニ何ソヤ此物タル血絡ナク神圣ナク
唯是レ「マルピキアーンセ」粘液ノ吸収管ニ由

テ軌固セラレタル者ヨリ他ナケレハナリ

第五十六章

「マルピキアーンセ」粘液ハ一ニ之ヲ「マルピキウス」ノ網膜ト名ケ其質半ハ流体ニ偶スル者ニメ甚タ水ニ溶解シ易ク表被ノ裡面ト華ノ表面トノ間ニ位置ス

(註)憶フニ此粘液モ亦表被ト同ク械(機)生体ニ偶シ雖キ者ニメ唯是レ華ヨリ分泌セラルヽ者ナリ

第五十七章

此粘液ハ即チ是レ皮膚ノ色ノ在ル処ニ夫レ華ハ人々共ニ一様ナル者ニメ皆其色白シ表被ノ色ハ稍此粘液ニ近通スルヲ以テ知ルヘシ皮膚ノ色ハ即チ此粘液ノ為ス所ナルヿヲ憶フニ皮膚ノ色ノ種々ナル其遠因ハ気候ノ寒暖ト年齢ノ老弱ト摂生ト稟賦ト疾病トニ在ル者ニメ其近因ハ「ブリュメンハック」ノ説ニ従フニ一ニ諭ヘハ皮膚黒色ノ人ノ如キハ其皮膚ヨリ分泌サレタル炭質ト水質ト「アトモス」(蒸気)ヘスヘリセリュフト」(チーデルケスラーケン)ニ押圧サレテ「マルヒキアーセ」粘液ト結合スルニ在ルモ

ノナラン

第五十八章

臆フニ於「マルヒキアーン」セル液ハ華中一種ノ器械有テ以テ此ヲ分泌スル者乎又臆ニ表被ハ唯此粘液ノ緻密ニ固凝セル者乎

第五十九章

華ハ敢猛ノ膜ニメ其質緻密ナル蜂窠状組織ヨリ成リ（原）尚薄一様ナラス内部ハ鬆疎ニメ海線様ヲナシ以テ脂膜ニ終ル其質中血脈ノ錯綜スルヿ甚タ多クメ其動脈末梢ハ表面ニ於テ汗管ト

ナリ又無数ノ吸収管アツテ其管口表面ニ列布シ又夥多ノ小腺アツテ皮脂ヲ分泌ス皮脂ハ油様ノ液ニメ通ク皮質ヲ滋潤ス華質ニ激滿セル神経ハ尤モ夥多ニメ其末梢ハ身体彼是ノ部分ニ於テ甚タ著明ニ血脈ト相結合シ以テ微少ノ乳頭状ヲ形成ス

第六十章

凡ソ人身ノ外皮ハ眼瞼手掌足蹠ヲ除クノ外通ク毛髪ノ生セルヿ実ニ他ノ獣類ニ異ルヿナシ毛髪ハ纖細柔軟ナリト雖モ其性靭強容易ニ

切断シ雑ノ其質血管神経共ニ有ルヿナク「イヂオエレキテリス」ニ按ニ「イヂオエレキテル」ノ体テルヒヲ含ムヲ以テ「エレキテル」ノ体ニ其質中自ラ十分ノ「エレキテル」ヲ蓄ヘ「エレキテル」ノ導ヲ為サヽル者ナリ其長短強弱伸縮ノ度色ノ濃淡生状ノ正斜ニ於テハ唯各人各自ニ違フノミナラス尚各部各々相等シカラス其根ハ皮ノ蜂巣状質中ニ在ル微細ノ小球ヨリ生シ細キ管ヲ以テ囲繞セラル其管「マルヒキアーセ」粘液ヲ貫テ微ク外表ニ出シ表被ニ被包セラル而シテ其管中ニハ一種ノ液ヲ含ミ外面ニ油様ノ液ヲ具フ凡ソ毛髪ノ用ハ外触ノ防護ト形容ノ美飾トヲ成スヿヲ主ル者ナリ

(注) 凡身体ヲメ「エレキテル」気ヲ得ルヿ遍度ナラサラシムル者ハ即チ毛髪ノ為ス処ナリ

第六十一章

皮ハ其質中神経及ヒ其乳頭状ノ最モ夥多ナル カ故ニ固リ知覚ヲ以テ其機用トスルヿ論ナシト雖モ其機用ノ尤モ鋭敏ナル処ハ手掌ヘ手掌ニ於テモ殊ニ指頭ヲ勝レリトス是レ掌及ヒ指頭ハ其皮膜理放尤モ多クメ神経乳頭殊ニ夥多ナレハ又其指頭ノ背ニハ爪甲有テ以テ摸探ニ

便ス凡ハ其廂角ハ丸メ表皮ト甚タ相近似シ唯
表皮ニ比スレハ堅硬ナルノミ

第六十二章

凡ソ知覚ノ用ハ入ヲ能ク物体ノ寒温軟硬軽
重固形流動乾湿滑渋形状及ヒ距離等ヲ弁知セ
シムルニ在リ

第六十三章

舌ハ味識ノ器具ニメ其体肉ハ丸ク其根口内ノ後部
ニツキ其前部即チ尖ハ舌下厭帯ヲ以テ下顎ニ繋
リ夥多ノ神経乳頭ハト細小ノ粘液腺ヲ布満セ
ル膜ヲ蒙リ其肉ハノ実体ハ許多ノ筋ヨリ成リ
以テ著大ノ運転ヲ為スコトヲ得ル其神経乳頭ハ
ハ三ナ第五対神経第三枝ノ舌ニ循ル者ノ末端
ヨリ成ル其他ノ舌ニ循レル神経ハ第九対神経
ト第八対神経ノ一枝トニメ皆其実体ノ筋ニ循
ルヲ以テ較著ノ運転ヲ成サシムルヲ主ル

注 味識ト知覚識トハ其区タ能ク相合致スル者
ニメ唯其器具製造ノ違フ処ハ舌ニ於ケル神
経膜ニ在テ粘液体表皮ハ共全身ニ在ル
者ヨリ柔軟弛緩ニメ薄ク神経血管相絡フ

殊ニ多クハ断津唾ト粘液トヲ以テ滋潤セルノミ其粘液ハ舌頂中ノ腺ヨリ分泌スル憶フニ第八対及ヒ第九対ノ神経何レモ全ク味識ニ関ラサルヲアラン已ニ舌下於テハ其神経一二ノ枝梢ノ乳頭状ヲ形成セルヲ著明ナリ

第六十四章

舌膜ハ其神経乳頭状ノ在ルアルニ由ル能ク有味的体即チ塩ヲ感覚スル固有ノ受性ヲ有スル亦能ク知覚ヲナスヲ得ルヲ故ニ塩或ハ特リ之ヲ衝動シ或ハ他若シ之ヲ衝動スルナリ衝動擾撹スルヲアルヲ寸ハ乳頭状内一種ノ変化ヲ起発シテ以テ味感覚ヲ生ス此変化ハ塩分子見形ノ種々ナルニ由テ「容」「動性」ノカニス」ニ発起ヒラルヽトニフ説アリト雖モ未タ信拠スルニ足ラス「原本当リナシ」「気化」「メカニス」「セミス」性ノ者ナルヘシ亦其外面ニ分泌スル処ノ粘液ハ能ク有味的体ノ作用ヲ適宜ナラシムルヲ主ル者ナリ

第六十五章

舌ノ外面口内ノ諸膜モ亦能ク微ニ味ヒノ感覚ヲ成スヲ得ルモノヽ如シ

第六十六章

凡ソ一種ノ味ヒノ佳悪ハ各人共ニ大抵一様ニ感覚スト雖モ固有ノ神経質ト殊ニ舌質ノ発動性ト其習慣ト想像ノ各自不同ナルカ為ニ其味ニ於ケル微細ノ分別ニ至テハ甚タ定了シ難シ

第六十七章

味覚ノ主用ハ唯々飲食ノ佳悪ヲ識ルカ為ニノミナラス尚能ク其利害ヲ弁スルニ在

第六十八章

鼻ハ嗅識ノ器具ニメ口上ニ位置ス其質骨ト軟骨トヲ以テ成リ半軟骨ノ鼻梁ヲ以テ其中ヲ隔テ両個ノ孔ヲ形成ス其両孔ノ面ニ見ル、所ヲ前鼻孔ト云其両孔深ク後部ニ至テ上頭骨後端ヨリ口内ニ通スル所ノ処ヲ後鼻孔ト云ヒ孔内裡面ニハ普ク海綿様ノ膜在テ血脈神経一対及ヒ第五対及ヒ粘液腺甚タ夥多ニ布満ス此ヲ嗅膜ト云嗅液ト称ス潤液ト此ヨリ分泌サレ以テ鼻孔内ヲ滋潤緩和シ能ク外傷ヲ防禦ス其嗅膜ノ鼻中隔ト海綿様骨ヲ被フノ処ハ第一対神経

ノ最モ多ク布蔓セル処ニメ即是レ固有ノ嗅識
ト異タリ又此ニ循ル処ノ第五対神経ハ唯々他
ノ神経ト感通ヲ成サシムルヲ主ルノミ
(注)第五対神経ノ二枝ノ鼻孔ニ循レル者ノ嗅
識ニ関ラサルハ何ノ理ソ憶フニ是レ此神経
ハ其質稍硬固ニメ粘膜表面ニ布蔓セス空気
ニ暴触セサルカ故ナルヘシ第一対神経ハ是
タ柔軟ニメ其末梢(梢)粘膜ノ鼻中隔及ヒ海綿(綿)様
骨ヲ被フ処ノ表面ニ終リテ髄様ノ乳頭状ヲ
形成シ粘液常ニ其面ニ塗布シ以テ過度ノ抵

觸ヲ防禦ス

第六十九章

此具ニ由テ弁識スル処ノ者ハ即チ諸体固有ノ
香気ナル者ニメ是レ気状ノ揮発ナル物質ナリ(揮発性ノ物質ト訳ス)
其之ヲ感覚スルヤ吸息ニ由テ引テ粘膜ニ触レ
シメ以テ其神経ノ内ニ一種(注)ノ機動ヲ発セシム
其機動ノ状ニ至テハ未タ分明ナラサルヲ猶他
ノ神具ニ於ルカ如シ其香気ニ二種ノ別アリ一
ハ能ク人ヲメ快カラシメ一ハ人ヲメ不快ナラ
シム其快カラシムル者之ヲ薫ト名ケ不快ナラ(芳香ト訳ス)

シムル者之ヲ臭ト名ク九テ強烈ノ香気ハ人ヲ
メ不快ナラシムル者ナリ

第七十章

偶々歎類ノ嗅臭ヲ弁識スルヿ人ニ勝ル者アリ
又人ニ在テモ其国土ノ殊ナルニ応メ嗅臭ノ機
用ノ大ナル者アリ是レ其鼻孔裡面ノ大ナルニ
由リ又小児ニ在テハ嗅臭ノ機用最モ後ニ発ス

第七十一章

嗅識ノ主用ハ呼吸スル大気ノ性ト飲食スル諸
物ノ性トヲ弁別スルニ在リ

(注)此識ノ全神圣頁即脳脊髄諸神圣ヲ云フ
ヲ為スヿハ九テ神圣力弛弱ノ疾病諭ヘハ脱
力、卒中、眩暈等或ハ神圣力不和ノ疾病諭ヘハ
搐掣、頭痛等ノ症ニ香烈鋭烈ノ品ヲ嗅入メ偉
効ヲ得ルヲ以テ知ルヘシ

第七十二章 第七十八中

耳ハ聴識ノ器具ニメ頭ノ両側顳顬ノ石骨部ノ
内ニ位置シ三部ノ別アリ即チ外耳中耳内耳是ク
外耳ハ動揺スヘクメ凹凸アル薄ノ軟骨ヨ
リ成リ延テ内部ニ入リ一個ノ空洞ヲ為スヿヲ

聽道ト名ク此部ハ軟骨ト骨トヲ以テ成リ外部
ノミニヲケルカコトキ皮ヲ以テ被ハレ許多ノ
脂腺此ニ布遍メ耵聹ヲ分泌シ出シ其聽道ノ内
端ニハ一個ノ膜在テ閉張シ以テ外耳ト鼓室即中
耳ノ界ヲナス此膜ヲ鼓膜ト名ク

第七十三章 全七

鼓室ハ耳ノ中部ナリ其室中ニ聽骨五ニ微少ノ
筋ヲ以テ相連接ス三聽骨ハ即鎚骨鎖骨鐙骨是ナ
リ鐙骨ノ根脚ノ部ハ卵円窓内ニ挿マル卵円窓
ハ此室ニ口ヲ開キ其孔迷路ニ通ス其他此室中

二円窓一名三角窓 耳ウスタキアンセ 次蛻管口ナル者アリ円
窓ハ薄キ膜ヲ以テ閉張サレ其孔ハ鼓内ニ連
シ次蛻管ハ其質骨ト軟骨トヲ以テ成リ鼓
室ノ前部ヨリ口内ニ通シ「シケヲーデルセ」膜ノ
展延セル者ヲ以テ被ハル

第七十四章 全内

迷路即チ内耳前庭 按ニ三半規管ノ口前ナルカ故ニ如此名クル乎 三半
規管蝸牛殻ノ三部ヨリ成ル其前庭ニハ槳溝有
テ其槳中ニハ二個ノ膜嚢其中ニ水ヲ充盈スル
者在置シ三半規管ハ各一個ノ膜管ノ水ヲ盈ツ

ル者ヲ含ミ其五個ノ口ト前庭ニ並ヒ開ク蝸牛殻ハ其上部「ボルタール」ニ口ヲ開キ下部ハ円窓ニ於テ其口ヲ鼓膜ニ閉ク几ソ迷路ハ全顳中皆透亮ノ水液ヲ含ム其液ハ此部ニ循行セル動脈ヨリ滲発スル処ノ者ニメ再ヒ吸収管ニ吸収シ去ラル

第七十五章 (全丁)

固有ノ聴神経ハ石骨ノ後面ニ於ケル溝渠中ノ二孔ヨリ内耳ニ入リ分テ「ボルタール」ト三半規管ト蝸牛殻トノ内ニ布蔓シ顔面神経ハ石骨ノ溝渠ニ入テ内耳ヲ通貫シ鼓室内ニ至リ其部ノ小神経纖維ト聴骨節ニ吹シ纖維ヲ分与シ其餘枝ハ皆顔面ニ循行ス

(注)聴神経ハ諸神経中ノ尤モ柔軟ナル者ニメ其状糊ノ如ク聴機ヲ主ル諸部ニ布蔓スル者ナリ

第七十六章

聴神経ノ迷路内ニ布蔓セル者ハ皆音響ニ感応スヘキ一種固有ノ触動性ヲ有ス夫レ音響ハ弾力体中微分子ノ顫動ヨリ発スル者ニメ其耳内

按音鳴ノ如キ卽真質中ニ衝ノ脈動ヨリ起ル者アリ又音ヲ無聲真觸番ト云ヘ

ニ感スルヤ媒ニ由テ觸ル、者アリ媒ナク直ニ觸ル、者アリ其媒ヲ為ス者ハ即大気ニメ具気中微分子ノ顫動ヨリ聽神圣固有ノ動ヲ起サシムル

第七十七章

外耳ハ喪鞏膜未スル響線ヲ受ケ自個彈力ト諸筋ノ力ニ由テ此ヲ聽道ニ輸入シ鼓膜ニ達セシムルヿヲ主ル聽道ノ前寧ハヤヽ音響ノ度ヲ節シ微毛ノ入ルヿヲ防クヿヲ主ル鼓膜ハ顫動ヲ受ケヲ鼓室内ノ気ニ與ヘテ直ニ円窓ヨリ迷路内ノ水液ニ與フルヿヲ主ル此液能ク動ヲ聽神圣ニ傳ヘテ以テ其神圣中ニ一種ノ機動ヲ起メ神識ニ音響ノ感覺ヲ為サシムル又其鼓室内ニ封閉セル所ノ気ト改駈各弦管ニ由テ能ク新陳代謝スル若シ此気ナキ者ハ鼓膜能ク外気ノ壓迫ニ堪ユルヿ能ワサルヘシ或云此改氏管ハ気ヲ交代セシムルノ外尚響線ヲ内ヨリ鼓室内ニ導キ入ルヿヲ主ルト或云響線ノ過度ヲ導キ去ルヿヲ

路内ノ水液ニ與フルヿヲ一ニハ之ヲ聽脊ト細筋ヲ能ク響度ニ応シ縮張スルヿヲ得ル卵円窓ト云ニ由テ迷路内ノ水液ニ與フルヿヲ主ル此液能ク此動ヲ聽神圣ニ傳

主ルト雖共ニ未タ穏当ナリトシ難シ

㊨此鼓膜ニハ高別ニ一二ノ筋纖維有テ能ク
張縮シ至微ノ音響ヲ神識ニ告ルコヲ得ル

第七十八章

音響ニ快ト不快ノ別アリ是レ或ハ其響ノ高下
ニ由リ或ハ其斷續ノ長短ニ由リ或ハ數品ノ同
時ニ発スル寸聽クコノ易難ニ由リ或ハ音響ニ
由テ発スル処ノ意中ノ思想ニ由ル者ニメ亦各
人ノ稟賦ト常習トニ関係ス是故ニ一種ノ音響
ハ常ニ一人ニハ同種ノ感覚ヲ為スト雖モ各人

ニハ亦各自ノ感覚ヲナスモノナリ

第七十九章

聽藏具ノ主用ハ甚タ大ナリトス即是唯人ニメ
能ク快美ノ感覚ヲ為サシム且ツ種々ノ音響ヲ
弁別セシムルノミナラス尚日常ノ交詣皆是レ
カ為ニノミ為スコヲ得ル

第八十章 第八十三ノ上

眼目ハ視藏ノ具ニメ但ニ顔面ノ半部額下ノ眼
窩内ニ位置シ其前面閉テ眼瞼爰ニ覆ハル眼瞼
ハ上下共ニ其緑ニ軟骨有テ睫毛以ニ連生シ固

有ノ筋有テ能ク開閉ノ動ヲナシ其内面ニ許多ノ小脂腺並列ス此ヲ迷爸木腺（メーボーム）ト名ク此腺ハ油様ノ液ヲ分泌シ以テ眼瞼ノ内面ヲ滑沢ニスルヲ主ル又此内面ノ膜ハ延テ眼球ヲ囲包スル膜ヲ結膜ト名ク眉毛ハ上瞼上ニ位置メ前額ヨリ流下スル汗ノ眼ニ入ル者ヲ拒防シ且ツ傍ラ過度ノ光線ヲ遮ルヲ主ル内皆内ニハ結膜重襲メ半月様ノ皺襞ヲ成シ此ニ次シノ隆起スルモノアリ此ヲ泪堆ト名ク其主用ハ迷爸木（メーボーム）脂ト相類似ス泪ハ鹹味ノ水様液ニメ眼ノ前部ヲ滋潤シ能ク汚物ヲ滌除スルヲ主ル者ナリ

泪腺、眼窩ノ上辺前部ニ在リ

此レ多クハ泪腺ヨリ分泌サレ亦タ微ク結膜ニ於ケル動脈梢ヨリ蒸発（蒸）シ内皆ノ泪炎ヨリ泪嚢中ニ吸収サレ泪嚢ニ入テ鼻孔内ニ流出ス若シ泪ノ分泌過多ニメ吸収ノ度ニ過クル寸ハ剰餘ノ溢液下瞼ヨリ頬ニ流下ス啼泣ニ於ケルカ如キ是ナリ

第八十章（全ク削ル）

眼球ハ諸種ノ膜ヨリ成テ其内諸種ノ液ヲ含ム其膜ノ最外囲ニ在テ後部ノ多分ヲ被包スル者

按白膜ハ他書ニ所謂
網膜ナリ

之ヲ白膜ト云此膜前部ニ在テハ円孔ヲナシテ
透明角膜之ニ接着ス白膜ノ内面ニ密接スル処
ノ膜ハ之ヲ脈絡膜ト云此膜ハ内面ニ褐色ノ粘
液ヲ塗布シ前部ニ於テハ白膜ト剥離シテ角膜
ニ密迩セス即チ白膜ノ前端内面ニ在ル所ノ白
色輪按ニモ様輪起ヨリ内部ニ離レ向テ硝子液前面ヲ
被ヒ許多ノ皺襞ヲ為ス此ヲモ様皺帯ト云此モ
様皺帯ト角膜トノ間ニ脈絡膜多ノ一膜アリ之
ヲ虹彩ト名ク此膜ノ前面ハ其色各人各自ニ相
コトニメ其裡面ハ脈絡膜裡面ニ於ケルカ如ク

黒
異色ノ粘液ヲ塗布ス此部之ヲ葡萄膜ト名ク而
メ其中心ニ一孔ヲ穿ツ之ヲ瞳孔ト云但シ未生
ノ児ニ在テハ其孔閉ス七月ニ至ルマテハ薄脆ノ
膜ヲ以テ之ヲ閉鎖ス脈絡膜裡面ニ在ル処ノ膜
ハ之ヲ神経膜ト名ク亦網膜トモ云フ即チ是視神
経白膜ト脈絡膜トノ貫キル處ノ孔ヨリ延ヒ展延セル者ニメ許多ノ
脈絡布膜ヌ蓋シ此膜ノ網状ハ此脈絡ヨリ成ル
又此膜ノ中心眼軸按ニ角膜ノ中心ヨリ瞳孔ヲ貫テ正直ニ達スルノ
全在ヲ眼軸トモ云フ当ル所ノ処ハ黄色ニメ甚タ柔脆ナル
小皺襞アリ

第八十二章 今一十

此諸膜内ニ充盈セル前ノ液ハ三種アリ其一ヲ硝子様体トイヒ其二ヲ水晶様液トイフ硝子様体ハ具偶甚タ軟薄ナル蜂窩状組織ヨリ成ル者ニメ眼球内後部ノ多分ヲ充填シ前面ハモ様軟帯ヲ以テ被ハレ次ニ水晶様体此ニ依リテ水晶様体ハ水晶様液ハ眼球内ノ前部ニ位置又膜嚢ヲ以テ被包セラルル水様液ハ眼球内ノ前部即虹彩ニ由テ前後両室トナレル所ノ空隙ヲ充填

第八十三章

神経膜即網膜ハ光彩ヲ受クヘキ一種固有ノ受性ヲ有ス凡ソ萬物体ヨリ発メ眼ニ入リ来ル光線ハ角膜上面ニ於テ眼ノ軸ニ循テ屈折シ水様液内ニ於テハ再次シルヤ、開キ以テ瞳孔内ニ入リ水晶様体ニ於テハ復著ク屈折メ益々軸ニ近迩シ硝子様体ニ入ルニ当テハ再ヒ次ノ開キ口カレ神経膜上面ニ合聚シ来テ以テ此ニ外物ノ影ヲ映写ス因テ具神経中固有ノ変動ヲ起シ以テ神識ニ視ルトノ感覚ヲ発ス

第八十四章

視神圣中ニ一個ノ動脉アリ状ヲ中心動脉ト名ク状脉ノ神圣膜ニ入リ末ル所ノ処ハ之ヲ皆矣ト名ク凡ソ状膜ハ状矣ヲ除クノ外処トメ外歟ヲ弁識スルノ性ヲ有セサル事无シト雖モ其尤モ能ク極メテ精微ニ映写スル所ノ処ハ唯眼軸ノ一矣ニ在リ是故ニ眼筋即チ六種能ク毎ニ運動メ見ント欲スルノ外物ニ其軸ヲ向ハシム

第八十五章

凡ソ外歟ノ網膜ニ映スルヤ皆倒写スル（癸）ニ人能ク其正歟ヲ見ル者ハ是レ神識ニ別ニ一個ノ眼目在テ状写歟ノ視ニ非スメ其歟上下左右皆一様ニ倒写スルニ由ル

第八十六章

人能両個ノ眼目ヲ以テ物ヲ見ルニ其単一ナルヲ得ル者ハコレ光線ノ感入両眼共ニ能ク相合一スルニ由リ尚且ツ憶フニ視神圣ノ互ニ相合着スル処アルニ由ルヘシ

第八十七章

凡ソ眼目能ク適宜ノ光線ヲ受容（容）スル者ハ虹彩能ク適宜ノ運動ヲ為スニ由ル其運動ハ即チ若

シ光線ノ網膜ニ射来スルヿ強クメ過度ナレハ瞳孔ヲ陥小シ弱クメ不足ナレハ能ク之ヲ開張ス按スルニ此運動ハ虹彩ノ血管ニ関係スルナルヘシ次者曰ク説未タ其理ヲ解スルヿヲ得ス

第八十八章

脉絡膜裡面ノ黒粘液ハ眼内ニ入ル光線ノ及ヘヲ拒防スルヿヲ主ル

第八十九章

凡ソ眼ノ物ヲ見ルヤ其物ノ距ル遠近必定セル度ニ応スルニ非レハ其明亮ヲ尽サス何トナレハ若シ其距離近キニ過クルヿ寸ハ光線未タ網膜ニ至ラスメ早ク合聚スレハナリ発レ𠮟眼目ハ固有ノ諸筋有テ稍能ク其遠近ノ度ニ適スルヿヲ得ル発ルニ若シ角膜及ヒ水呉体ノ前面迅起過度ナル者ハ近視眼トナリ若シ其平坦ニ過ヘスハ遠視眼トナル

第九十章

凡ソ眼目ノ用ハ唯能ク外物ノ色ヲ弁別スルニ在リト雖モ𠮟発レ𠮟習慣ニ由テ亦能ク其物ノ大小遠近状動静等ヲ明ニ決定スルヿヲ得ル

第九十一章

視識ノ主用ハ敏ク離隔セル至遠ノ物ヲ速カニ
糸別スルト諸想像力ヲ補助スルト敏ク人ヲヲ
僥倖ヲ得セシムルトニ在リ

第三面　論神識力

第九十二章　原本第九十三、

神識ハ外識ニ由テ思慮「ホールステヲ得ル者ニ
メ生ノカラ分別「ベクリンク」
ヒ敏ク思考「アーンスコヲ形成「ホルメン」スルハ神識

固有ノ性ナリ即チ

第九十三章

神識ニ二個ノ別アリ一
一ヲ意識「ヴェトル」ト云フ

第九十四章

知力ハ即チ見レ神識ノ思慮ヲ得テ以テ之ヲ運
用スルノ受性「ハットハーナリ其敏ク神識ヲメ
外感ヲ受テ思慮ヲ起サシムルニ至ルヲ卑知力
「ヲーゲンシャフト」ト云ヒ思慮ヲ起メ以テ分別スル
ヲ高知力「ホーゲンフト」ト云思慮ノ未タ不明ニメ

固證シ難キ「トンケル、ヌン、ソンデ際ヲ意「ゲヴィーデンド」ト云其明亮ニメテ已ニ固證スルヲ得「ドイレ」ーキ、エン、ベット、ベウエストセイン」ヲ識「ケンニス」ト云フ識ニ思考ト分別トアリ両ラ倶ニ現ニ思念ヨリ出ツ「想像力ハアイルゲンリスカラクト」即チ目前ニ在ラサル事件ヲ思考スルノ力ニメ其未タ心意上ニ出サル者ヲ「バンメシーン」蘭名「イルデンク」ト云ヒ已ニ心意上ニ発スル者ヲ記憶「ゲヘウゲントニス」ト云フ智「フルスタント」ハ神識ノ事件ヲ分別メ以テ自ラ事ヲ発スルノ力ナリ「或ハデンケンスカラクト」工夫「ヘールテールハスカラクト」各個ノ変件ヲ一般ノ変件迄ニ考成スルノ力ナリ「フルニヲハ一般ノ変件ヲ各個ノ変件ニ配共シ考フルノ力ナリ」

第九十五章

意識ハ神識ノ能ク善美ナル者ハ之ヲ好欲シ醜悪ナル者ハ是ヲ忌嫌スルヿヲ得ルノ力ナリ其好欲ノ度ノ最ヒ劇甚ニメ義理「レーデ」ノ能ク之ヲ制伏スルヿヲ得ス由テ以テ終ニ体中ヲ不隨意ノ運動ヲ発スルニ至ル者ハ之ヲ情「ハルツト」ト名ク

公私病理論ニヨクインテンチン公衆衛生分別スルコトノ難キ身体ニ害アル者自然ニ之ヲ忌嫌シ利アル者自然ニ之ヲ好欲スル所ノ動物傾向ノカナリ其ヲ以テ其知慧愈々ヒ愈明ナモノニシテ愚蠢野蛮ノ人心ニ北六然ニ明ナリ

内部好欲ノ蔵名「インウェンヂヘ、アーンヂリフト、デルベゲーテ」羅甸名「インスチンクトゥス」ト人ニ於テハ他ノ動物ニ於ケルカ如ク較著ナラス

第四回　論挙動力

第九十六章

挙動ノ器械ハ筋ト筋ハ柔軟ナル人体ニ在テハ赤色ニメ稍々弾力ヲ有シ其纖維ハ蜂窩状組織ニ由テ種々ニ相會束シ以テ「ビェンテルス」ヲ為ス「ビェンテルス」ト再ヒ相會諸筋ヲ以テ「ヒュンテルス」ノ全質ヲ為ス」

アリテ其端骨ニ固着シ質中ニハ血脈吸收管神経ヲ含ミ之ニ錯綜シ両端腱ニ終ル腱ハ滑沢其質筋ニ比スルニ甚タ強固ニメ弾力強ク血脈神経共ニ微ニメ固有ノ触動力ナシ或ハ云腱ハ筋ハ蜂窩状莢膜ヨリナル者ナリト憶フニ亦臆説ナラサルニ似タリ

第九十七章

挙動ノ器械ニ数動ト所動ノ二種アリ数動ノ器ハ即チ筋ニメ所動ノ器ハ骨ナリ筋ノ赤色ハ全身皆一種ナリト雖モ質中固有ノ色ニ非スメ唯其中ニ錯綜セル血脈ニテ係ス

ル者ナリ故ニ之ヲ咬ム者ハ其色全ク消散ス
筋ノ質ハ極微細小ノ纖維ヨリ成ル者ニメ
其纖維ノ互ニ相合着スルヤ活物膠ニ由ル乎
活物油ニ由ル乎ヲ知ラスト雖モ又合着力ハ
大ニ生活力ヲ補助ヲ得ル者ナリ何トナレハ
今死体ノ筋ヲ取テ之ヲ扶裂スルニ甚タ易シ
ト雖モ活体ノ筋ニ於ルヽ、ニ次シ
ノ変ヲ為サヽレハナリ 憶フニ其極細纖維ハ
各々蜂窩状ノ莢ヲ以テ被包サレ蜂窩状組織
ヲ以テ許多相會束合着メ「ビュンデルテース」ト

ナリ再ヒ相會束ノ大「ビュンテルス」ト
テルス」復タ相聚テ終ニ一個ノ筋ヲ形成ス其
「ビュンデルチース」間ニハ脂肪アルトナシト雖
モ大「ビュンテルス」間ニハ偶以アリヲ見ル其脂
肪筋ノ間ニ於テハ甚タ夥多ニ以テ包ミ以
テ近傍ノ諸器ト合着スルヲ防ク全質ノ
蜂窩状質中ニハ水蒸気充盈セル力故ニ筋敏
ク柔軟ナルヲ得且ツ運動ニ便ナルヲ
得ル

第九十七章

骨ハ体中ニ於テ尤モ堅剛ナル部分ニメ諸凝体ノ柱礎タルヿヲ主ル者ニメ其質中燐酸性ノ石灰土ヲ含ムヿ他部ニ比スルニ最モ多ク蜂窩状組織ヲ有スルヿハ他部ニ違フヿナク血脈吸収管共ニ其中ニ循リ神圣ハ唯脈管ノ質中ニ在ル者ノ外面ニ循ル者ナク色ハ白色ニメ(微紅色ヲ帯ヒ又色黄疸病ニ於テ黄色トナリ)滴草ヲ煮(メイカラツテ)フ後ハ紅色トナル諸骨ノ形状挺起凹陥等ハ皆入々相定レル者ニメ歯ヲ除クノ外其外面皆骨膜ヲ被ハサル者ナク内空ニハ骨髄充填スル骨髄ハ脂肪状ノ流質ニメ骸ク骨ヲ軟和シ且ツ之ヲ

メ軽カラシムルヿヲ主ル

第九十八章 (全中)

凡百ノ諸骨其始ニ於テハ皆軟骨ナリ軟骨ハ漸次ニメ白色微透明ヲ弾力強ク柔撓スヘシ諸軟骨多クハ皆漸次ニ変メ骨トナルト雖モ亦生涯軟骨ニ止ル者アリ即チ是固有ノ軟骨ナリ(喉頭外耳諸関節ニ於ケル者是ナリ)軟骨ニ亦骨ニ於ケル如ク外囲ニ膜アリ之ヲ軟骨膜トス此膜其軟骨ノ骨ニ接着スル所ニ於テハ骨膜トナル

凡ソ軟骨ノ変ノ骨トナルヤ其始メ其質中ニ
動脈末梢ヨリ分出スル所ノ骨質分子軟ク凝固
ノ骨狹(ベンケイ)ナル皆ヲ形成シ以骨狹漸ク増長メ終ニ
全骨ヲ成スニ至ル

第九十九章 全一下

凡ソ関節ノ運動ハ其骨端ヲ被フ処ノ関節
軟骨ト関節液トニ由テ軽易ナルコヲ得ル

第百章 第六十九ノ上

諸筋ハ皆一種固有ノ発動性アツテ刺戟セラル
、寸ハ直ニ収縮スルノ力ヲ有ス此力ヲ筋力
名ケ或ハ肉力ト名ケ或ハ華尔列児ノ触動性ト
名ク其力タル固リ単一ノ弾力ト違ヒ又神圣觸
動性トモ違フ然ニ此ノ神圣触動性トハ全ク干
渉セサルモノニアラス
(注)筋纖維ノ運動ニ於テハ血液ノ運行赤缺ク
ヘカラサルノ用ヲ為ス是故ニ血脉ヲ切断ス

ル者ハ其筋直ニ運動ヲ遏絶スル1猶神圣ヲ
切断スルカ如シ

第百一章 全十

諸筋ノ挛縮スルヤ其質中発スル処ノ変化ノ性
如何乎吾輩未タ之ヲ知ル1ヲ得スト雖ニ其筋
此時ニ当テ敦テ膨脹スル者ニアラス
注 按ニ刺奢蘭度ノ説ニ曰ク筋ノ運動タル
其挛縮ノ時ニ於テ膨脹セス却テ其形ヲ減
ス1スル者ナリト今筋ノ運動ノ性ニ由テ考ル
ニ其説実ニ当レリトナレハ是レ纖維ノ挛縮
セヨリナル者ニメ其纖維ヲ合着セシムル蜂窠
状組織此レカ為ニ屢縮サレ由テ強硬堅固ス
レハナリ

第百二章 第百一

凡ソ動体中ニ於ケル百般ノ運動多クハ皆筋ノ
挛縮ニカ、ラサル者ナシ譬ヘハ拍約筋ニ由テ
諸口蓋ノ閉サレ諸空洞ノ閉ス統スル筋ニ由テ
ハ其空洞能ク狭窄サレ諸管ノ長ニ循ヒ或ハ之
ヲ輪状ニ囲統スル筋ニ由テハ只管或ハ延長サ
レ或ハ短縮サレ或ハ寛ケラレ或ハ窄メラレ両
端各異ノ部ニ固着スル筋ニ由テハ其両部互ニ

動揺サル、等ノ如キ是ナリ此両部互ニ動揺スル者ニ於テハ其一方動揺シ易キノ部必ス他ノ一方ニ牽動セラル、モノナリ

第百三章

諸筋ノ運動スル其力甚速共ニ大ナリ因ヨリ此ヲ補助スル者種々アリトハ雖モ其ノ最モ著シキ者ハ骨即チ動カサレ処ノ者亦甚タ多シ何トナレハ識筋ノ骨ニ着クハ多クハ屢起器原名「エ、ンアルノ状ヲ為ス器械術ニ由テ是ヲ見ルニ当ニカノ減ス

補助ノ筋ニテハ此ノ如キ事ニ注意ス可キ事ナリ

（此二節ハ前ノ偏附ナリ）

（此ハ二節ノ前ノ偏附ナリ）

（此ハ二節ノ前ノ偏附ナリ）

（此ハ二節ノ

神圣ノ觸動性タル諸器ノ異ルニ応メ各々相異ルカ如ク筋ノ觸動性モ諸器ノ異ルニ応メ各々相異ナリ

第百六章

第二十四参考

或云蜂巣状組織ニモ亦「華児列里安設」觸動性アリトイフト魚氏焚氏未タ較手タル微證ヲ得ス

第百七章

諸筋運動ノ身体保護ニ利用ヲ為スヤ媒ナク直チニ反ス者アリオンミッテルバール」媒ヲ次テ反ス者アリ「ミッテルバール」

第五回　論睡眠

第百八章　原本第百六、

神圣質ニメ神識ニ感覚ヲ為サシメ諸筋ニ随意ノ運動ヲ起サシムルノ間之ヲ興奮トイヒ其感覚ト随意ノ運動ト共ニ休止スルノ間之ヲ睡眠トイフ此両機常ニ互ニ相交代ス

第百九章

睡眠ノ近因ハ即唯神圣質ノ休止スル者ニメ其誘因ハ種々アリ即労動後ノ虚脱衰弱抵触ニ由テ発動性ノ費耗スル者ヲヨビ脳質固有ノ運用

ヲ妨クル諸病等是ナリ

(注)成人僻説ヲ立テ曰睡眠ハ血液ノ腦ニ送輸スルヿ多キヨリ発スル者ナリト発レ𪜈今実験ニ由テ之ヲ見ルニ仌ノ血液ヲ腦ニ送輸スルヿ多キ諸病ハ常ニ睡蔭ヲ妨クル者ニメ且ツ睡中ハコトニ腦質萎縮スル者ナリ憶フニ睡眠ノ近因ハ腦中血液ノ減退ニヨルモノナラン如何トナレハ(親)シク実験スルニ脚冶刺絡下利冒寒ノ後及ヒ飲食ノ後等凡テ血行他部ニ増進スル者皆常眠ヲ発スレハ

亡発レ𪜈又卒中尺頭蓋骨傷及ヒ頭蓋骨ト腦トノ間ニ血液ノ溢出スル者等ニ由テ発スル嗜睡ハ此ノ比ニアラス

第百十章

睡眠ノ将ニ発セントスルヤ必ス疲倦ノ症ヲ発スル者ナリ

第百十一章

不隨意ノ諸運動ハ睡中尚保続スト雖𪜈寤覚ノ時ニ比スレハ稍ニ寛徐ナリ　睡寤ニ由テ神全

復再ヒ整復スルヿヲ得ルヿ寸ハ僅微ノ抵触ニ由テモ醒覚スルヿヲ得ル者ニメ以取心ス欠伸ヲ発ス

㊟睡中ハ随意ノ諸運動皆休止シ五神皆其常慣ノ抵触ヲ感覚セス眼目閉スルニ至ル耳ハ其機用ヲ保続スルヿ左モ長シト雖モ終ニハ全ク感覚ヲ失フ然ニ飲食消化乳糜吸収及ヒ諸吸収ノ機能ハ却テ増長シ遂ニ気ハ滅シ血行ハ寛徐トナル睡ノ覚ル寸ニ至テ欠伸ヲ好ム者ハ憶フニ此由テ以テ其部即チ肺臓ノ血行ヲ進メ神経液ノ流通ヲ易カラシメンカ為ナルヘシ

第百十二章

睡眠全ク塾セスメ内識ノ機動全ク休止セサル者ハ夢ヲ生ス夢ニ由テハ偶々随意ノ運動ヲ起シ或ハ所謂ル夢走ヲスルニ至テレンヿヲ成スヿアリ

梅二夢走夢中二於テ走ノ痛ヲ後自ラ知ラサル者ナリ

論使人身為機生体之機能第二

第百十三章 原本第百十二、

人身ヲシテ機生体タラシムルノ機能ニ為スル者ハ凡ソ能ク身体ヲシテ各個ノ諸部ヲ保固セシメ且ツ能ク之ヲシテ生々蕃殖ヲ成サシムル者之レナリ

第一回 論血液循環

第百十四章 第百十三、

人身中ノ血液ハ赤色温暖ノ液ニシテ心蔵ト脉管トノ中ニ含マレ循環流利シテ止ムコトナク諸液中ノ最大緊要ナル者ニシテ凡ソ体中諸液未熟ナル者ハ皆此ニ送入サレ分離セル者ハ皆此ヨリ出テ凝体モニ皆之ヲ以テ栄養セラル

第百十五章

血液ハ健康ノ体中ニ於テハ一種ノ純液ノ如シト雖モ之ヲ体外ニ出ス者ハ自ラ相分析シテ始メ水様ノ葉気ヲ発スルノ外三種ノ近成分トナル即チ一血水(他各所謂ブルードウォーター沁乙是也)ト華氏ノ験温管百五十度ノ焄気ヲ以テ凝固セシムヘキ者ニシテ其二繊維質(フィブリン)ト為ス者ト其三

出セル血液ヲメ直チニ凝固スルヿヲ得セシム
ル所ノモノニ其三紅部(ルブラデール)及質至微ノ小球ヨリ成
ル此三種ノ者ノ相分析スルヤ又黄(ルテオ)ノ漸次ニ凝
固ノ血水ト血塊(ブルードクーク)トニ分ル又血塊ヲ取テ能ク之
ヲ洗滌スルヿハ紅部自ラ滌除サレテ纖維質ヲ
残ス血液ノ遠成分ハ予已ニ第四章ニ於テ略
説セル所ノ者是ナリ然レ𪜈唯此紅部ハ体中他
ノ部分ニ比スルニ鉄分子ヲ含ムヿ最モ許多也

第百十六章

血液ノ紅色ハ、固ヨリ紅部固有合和ニ関係スト
𪜈亦血液ノ生気ニ觸ルヽ寸鉄分子ノ
酸質ト結合スルニ由テ増進スルナルヘシ

第百十七章

生活体ニ於ケル血液循環ハ心臓ヨリ動脈ニ出
テ動脈ヨリ静脈ニ移リ静脈ヨリ復タ心臓ニ收
入スル者ナリ然ルニ往古「ハルヘース」氏ノ時ニ
於テハ世人皆以為ラク血液運行ハ唯静脈ヲ以
テ進退スル者ナリト今只ノ循環ノ状ヲ知ラン
ト欲セハ宜ク試ニ体ノ一部ヲ縛帯スヘシ動脈
ハ必ス臭縛帯ト心臓トノ間膨脹シ静脈ハ縛帯

ト末梢即チ動脈末梢ヨリ起ト ノ間膨脹スルヲ
処ノ静脈根始ナリ
静脈血ノ收流スル者ニメ動脈血ハ輸行スル者
ナルコヲ知ルヘシ又他静脈内ニ注入セル水液ノ行及ヒ血液溢出
逆流後脈内ニ注入セル最要ノ器ニメ胸腔
常ニ多クハ動脈末梢ヨリ発スル等皆以テ之ヲ
証スルニ足ル

第百十八章 第百六十六ノ上

心藏ハ血液ノ循環ニ於ケル最要ノ器ニメ胸腔
内ニ位置スル内空尖形ノ筋質ニ被包セラル心嚢ヨリ分泌スル薬気ニ由テ心
ノ外面滑沢ヲ得以テ摩傷愈着ノ
嚢ヲ免ル光端ハ下方ニ向テ左側ニ偏ス其製造ハ
一個ノ心室ト二個ノ附室（一名「アーセ」ト即両静
ノ洞ストニ個ノ心耳トヨリナル脈ノ心ニ接着スル処
部共ニ一種ノ膜ヲ以テ被フ又外面膜ハ即チ心嚢
ノ諸脈管ニ接着スル処ヨリ発延シ来ル者ニメ
内面膜ハ諸脈管ノ内面膜ヨリ発延ス両個心
室ハ其間肉状ノ中隔有テ以テ相分ル其中隔両
面ハ心室内ニ於ル他ノ内面ト等ク繚乱セル軟
著ノ索條在テ或ハ乳頭ノ状ヲナシ或ハ木根ノ
状ヲナス而メ其両傍一ハ之ヲ前室（即右心
室ト云ヒ

一ハ之ヲ後室即左ト云フ前室ハ其内室稍短メ
濶リ其肉薄ノ後ハ其肉稍厚シ此両室各二個ノ
口アリ其一ヲ静脈口ト云ヒ一ヲ動脈口ト云ヒ一
ヲ肺動脈口ト云ヒ一ヲ肺静脈口ト云フ静脈口
ハ前室ノ静脈ト接スル処ノ処ニメ又縁白色ノ
輪囲繞シ内面膜畳重ヲ為シ三尖瓣ヲ形成ス動脈口
ハ後室ノ動脈ニ接スル処ニメ又縁輪状ノ膜有
テ界限ヲナシ三個ノ半月様瓣此ニ懸リ又毎瓣
各ス中部ニ於テ微次ノ粒ヲ具フ肺動脈口ハ前
室ニ開テ始ト動脈口ト状ヲ同シ肺静脈口ハ

後室ニ在テ二尖瓣子様瓣ヲ具フ
囲心蔵ハ左ノ胸腔内ニ在テ心嚢ニ被包セラ
ル心嚢ノ用ハ心蔵ヲ固持メ動揺過度ナラサ
ラシムルニ在リ故ニ鞏ク且横膈ト結着ス

第百十九章 全上

附室ハ心耳即附室ノ展ヲ云其ニ短ク且濶ヲ為ス者
薄ク心蔵ノ内外面膜ノ重襞ヨリ成リ其膜間ニ
ハ筋纖維ノ濶様ナル肉條位置シ其室中隔有テ
両部即左右耳ニ分ル其中隔ハ亦心蔵ノ内外面膜ノ重襞
セル者ニメ其膜間亦筋纖維アリ未生ノ胎児ニ

在テハ此中隔ニ卵円孔ナル者有テ障膜此レニ
懸リ其障膜ハ生後漸ク其縁ニ愈着シ終ニ唯
瘢痕ノミヲ残ス 両附室ト各々其接スル処ノ
心室内ニ納ル即チ前室ニ在テハ静脈大幹ノ血
ヲ受ケ後室ニ在テハ肺静脈ノ血ヲ受ク 又下
幹静脈ノ附室ニ接スル処ニハ「改氏弁ト名ル障
膜懸リ 心蔵ノ実質ヲ栄養センカ為ニハ固有
ノ血脈ト神圣トアルト猶他ノ諸肌ニ於ケルカ
如シ

(注) 心蔵ニ循行セル神圣ハ其原ヲ募延神圣ト
助間対神圣トニ資ル者ニメ其質甚タ柔ク其
数少シ

第百二十章

心蔵ヨリ起ル処ノ諸血脈種々アリ皆水ノ枝極
ヲ生スルカ如キ状ヲ以テ全身諸部ニ蔓延ス此
脈ノ種類ハ其中ニ循行スル血液ノ向方ニ従テ
此ヲ区分ス即チ心蔵ヨリ以テ血液ヲ各部ニ輸
スル者ハ之ヲ動脈ト云フ体中各部ヨリ血液ヲ
心蔵ニ収流セシムル者ハ之ヲ静脈ト云フ

第百二十一章

動脈ハ膜質ノ管ニメ其原ヲ心臓ニ資リ各部ニ勇延シ枝分スル毎ニ漸ク狭窄トナル其質三襲ノ膜ヨリ成ル其一個宥膜(ケン)見レ身体各部ニ於テ其部ノ蜂窠状組織ヨリ尚外膜ヲ得ル其二肉膜(ニクマク)ノ内面膜是レ〻此諸膜亦各々其栄養ノ為ニ自己ノ動脈ヲ具フ

第百二十二章

諸動脈ハ皆必ス其原ヲ動脈大幹ニ取ル者ニメ其管内静脈ヨリ狭ク其膜ハ稍厚クメ弾力強ク其岐分スルヤ木ノ枝ヲ生シ極ヲ分ツカ如ク漸次ニ分レテ微細ノ條緡トナル凡ソ動脈支ハ再ヒ復タ合同スルヿナキ者ナリト雖モ唯体中一二部分ニ於テハ動脈大枝ノ互ニ相接合スル者アリ如此ク緡分スル其終端一分ハ静脈ノ微末梢ニ終リ一分ハ已ニ血液ヲ通セサルノ細管ニ終ル此細管ハ即チ所謂葵気管栄養管分泌管ナル者是レナリ

第百二十三章

静脈ハ其質唯(唯)固有膜ト内面膜トノ二襲ヨリ成

ル者ニノ勁織維ハ唯只大幹ノ心藏ニ近迩セル
処ニ在ルノミ只他ニ於テ此レアルヿヲ見ルヿ
ナク只内面膜ハ各部ニ於テ較著ノ皺襞ヲナシ
以テ障膜ヲ以成ス　凡ソ此脉ハ動脉ニ比スル
ニ只管内寛ク只勇行枝數定リナク只膜軟ニメ
薄ク弾力少ク只原ヲ動脉ノ至微末梢ヨリ取リ
極ヨリ枝トナリ幹トナリ幹トナツテ終ニ両個ノ静脉大
幹即上幹下幹トナリ以テ動脉ノ血液ヲ此序ニ隨テ心藏ニ
收入セシム
(注)凡ソ動脉ハ只勇行常ニ静脉ヨリ深シ故ニ
飲ク只外傷ヲ防禦スルヿヲ得ル　静脉ノ勇行
スルヤ互ニ相接合スルヿ各部ニ於テ甚タ多
シ故ニ只皮分ノ木枝状ヲ為スヿ動脉ノ如ク
相似ス

第百二十四章

心室ト附室トハ常ニ相番替ノ縮張ス故ニ静脉
両大幹上幹下幹ノ血ノ前附室右附室ニ入リ肺静脉ノ
血ノ後附室ヲ附室ニ入ル間ハ両附室共ニ寛張ヲ
両心室共ニ縮窄シ只血ノ後附室ヨリ後心室ニ
入リ前附室ヨリ前心室ニ入ル間ハ両附室共ニ

縮症ノ両心室共ニ寛張シ前心室ノ血ノ肺動脈ニ出テ後心室ノ血ノ動脈大幹ニ出ル間ハ両室縮症シテ両附室再ヒ寛張ス此縮張ノ諸動ニ由テ以テ静脈大幹ノ血液前室ニ入テ肺ニ至リ肺ヨリ後室ニ皈テ再ヒ動脈大幹ニ出テ以テ全身ニ普達スルヲ得ル心室内面ノ肉條出于ハ前敏ク心室ノ縮張ヲ助テ以テ敏ク血液ヲ噴出セシメ脈管口ニ懸ル処ノ瓣膜ハ敏ク血液出入ノ度ヲ節シ且ツ皆逆流ヲ防クヲヲ主ル

第百二十五章

心ノ夾端ハ心室ノ縮症スル毎ニ左胸ノ内面ニ向フテ皆動ヲ外ニ応セシム即チ心悸動ナル者是ナリ而メ皆動ハ常ニ動脈ノ搏動ト相合致ス由テ以テ知ルヘシ心室ト動脈ト皆縮張互ニ相及スル者ナルヲヲ挨ニ動脈ヤ寛張ニ由テ外応ス悸動ハ縮症ニ由テ外応スル脈動ハ大抵大人ニ在テハ一分時間七十動許ナル者ニメ皆数小児ニ在テハ昜タ多ク老人ニ於テハ大ニ少ク亦体ノ長短稟賦ト強弱各自ノ作業ホニ由テ皆遅速強弱各種ナル者ヒ

第二十六章

心室ノ縮症スル甚力ハ甚タ強烈ナル者ニ
ニ後室ハ最モ勝レリ

第百二十七章 第百三十二上

死ニ臨テ心室縮症メ遏絶スルヤ後室必ス前室
ニ先ツ是レ前室ハ仍ホ流ノ血ニ由テ刺戟セラ
ル、コト稍長ケレハナリ

第百二十八章 第百三十二下

今華尓列児(ハルレー)人名ノ発明ニ従テ血液ノ刺戟ヲ後室
ニ成サシムルヤハ能ク後室ヲシテ前室ノ死ニ後
ル、コトヲ得セシム因テ以テ證スヘシ心室ト附

室ト相番替スル縮張ノ動ハ全ク是レ血液ノ刺
戟ニ起因スル者ナルコトヲ

第百二十九章

心蔵ノ運動ハ不随意ノ者ニシテ其動性ハ猶他
ノ諸筋ニ於ルカ如ク其神圣ニ牽縮ノ関係スル
者(筋ニ其ノ動性ノ機動ハ神圣ノ牽縮ニ関係ス
者ニアラス唯神圣質感動ノ劇甚ナル症ニ於テ
ハ此ニ由テ変ヲ生スルコトアルノミ

第百三十章

動脈中血液運行ノ勢ハ心蔵ノカト動脈固有ノ

縮力トニ関係スル而ヲ以テ固有縮力ハ又固有膜内
面ニ在ル処ノ筋織維ヨリ発スル者ニ又心臓ノ
力ニ由テハ以テ脈寛張シ固有ノ縮力ニ由テハ縮
瘁スル又縮瘁スルヤ常ニ固有ノ寛度ヲ過ク以縮
瘁固有ノ寛度ニ復スルノミナルヲハ心臓ト動
唯弾力ニ由ルト云テ可ナルヘシ
脉トハ又縮張互ニ相及スル者ニメ又動脈ノ起
因ハ亦心臓ニ於ケルト同ク（按ニ即血液ノ刺戟ニ由ルヲ云フ亦
タ又動ハ不随意ニ発レ既ニ由テハ又動ニ変ヲ生スルヿアリ

第百三十一章

静脈中ニ於ケル血液ノ運行ハ甚タ緩徐ニメ又
脈大幹ノ心臓ニ近迩セル部ノ外敢テ搏動アル
ヿナク又血液ハ唯心臓ノ力ト動脈ノ力ト静脈
固有ノ弾力ト又脈ノ蔓行セル部ノ近傍ニ於ケ
ル筋ノ縮張ト近傍ニ於ケル動脈ノ搏動トニ由
テ運輸セラル又近傍ニ於ケル者ノ壓迫ニ由ル
カ如キハ又力更タ微ニシテ且ツ管内ニ於ケル障
膜以テ厳ク又血行ヲメ心臓ニ向フヿヲ得セシ
メ亦血液ノ重力モ又シタク又運行ヲ助クルヿア
リ又又心臓ニ近キ処ニ於テハ心室ノ吸入スル

力欤ク又運ヲ進ムルヿヲ得ル　又他ノ脈ノ枝
数多キト管内ノ寛キト持合ノ処ノ多キト皆欤
ク又血ヲヌ流利シ易カラシムルニ足ル

第百三十二章

血液循環ノ機欤中ノ最要ナル者ニ血
液欤ク此レカ為ニ凝体ヲ栄養シ諸液ノ分(利)
由テ以テ全体生活力ノ保護ヲ為スヿヲ得尚且
ツ自ラ欤ク妙合ノ流利シ欤ク腐敗ヲ免レ欤ク
全身ニ普達シ傍ラ次シノ体温ヲ発スルヿヲ得
ルヽ

第二回　論呼吸

第百三十三章　(京本百二十八)

呼吸ハ(已ニ産出スル人血ニ在テハ)甚タ欤ク血液
循環ト相関応スル者ニメ又呼ハ即チ肺蔵ナリ
肺ハ気管ト相連続メ胸腔ニ位置ス

第百三十四章

胸腔ハ又周囲脊椎骨(ボルストヽヘルベル)　胸骨ト軟骨部ト　肋骨ト
テ粧礎トシ助間筋又肋骨ノ間ニ位置シ下底ニ
ハ横膈又負ニ腱様部トアリ　ナル者有テ以テ腹腔ト
衆膈シ周囲ノ内面ハ肋膜ヲ以テ覆ワル肋膜ハ

二個ノ嚢状ヲ為ス者ニメ又両嚢相接スル処ハ
即縦隔膜ナリ而メ又縦隔膜ノ前後ハ相接セサ
ル部有テ以テ次ノ空際ヲ為ス

第百三十五章

此肋膜ノ嚢内ニハ両個ノ肺臓有テ之ヲ充塡シ
水様ノ葵気又間ニ発泄シテ互ニ愈着ヲ為サシ
メス　縦隔膜ヨリ両肺ノ間ニ向ヒ肋膜ノ重襞
セル者上リ至ル之ヲ肺(両肺ノ外膜トナル)帯ト云フ此帯再ヒ
裂リ(肺ノ実質ハ微小襞裂ヨリ成ル)襞裂ノ再ニ奥数至微ナル蜂巣状質ヲ
以テ成リ又蜂巣状質ハ肺動静脈ノ枝梢纏絡シ

気管ノ至末梢又内ニ口ヲ開ク　肺中又別ニ又
質ノ栄養ヲ主ル処ノ一種ノ血脈(ブロンキアール)アリ

(迚)肺臓ハ較著(著)ノ襞裂アツテ相分タレ右肺ハ
三葉トナリ左肺ハ二葉トナル而メ左肺ハ心
臓ノ又部ニ在ルカ故ニ又形大ニ右肺ヨリ小
シ

第百三十六章

気管ハ下肺臓ニ連続シ上口内ニ出テ孔ヲ次ニ
開ク次部ヲ喉頭(喉)ト云フ又位置頚ノ前部中央ニ
在リ喉頭ハ諸種ノ軟骨相囲続シテ声腔間ヲ作

ル艾軟骨一ヲ環状軟骨（リングスヨウナリセ）ト云一ヲ披裂軟骨（ベクシンホルミ）ト云艾数艾二個艾他ニ三ノ輪状軟骨アリ艾披裂軟骨前面ヨリ甲状軟骨（シキルズヨウナリセ）ノ裡面ニ向テ連ル二対ノ靱帯アリ上部ノ一対ハ之ヲ喉際靱帯ト名ク即チ是レ喉ノ孔際ヲメ狭庳（アクヒ）ナラシムル処ノ者ニ艾軟骨（アリテノロイドケーヒス）ハ薄片ノ一軟骨ニメ舌根ニ接ノ喉頭前ニ位置スル而メ此喉頭ニハ諸ノ前有テ以テ諸軟骨皆随意ニ運動スルヿヲ得艾内面ニハ口内ノ表膜ヨリ展延シ来ル一種ノ膜被アル艾膜ニハ粟数ノ神経ト粘液腺ト布置シ喉頭内靱帯ノ間ニ於テハ艾膜一対ノ小嚢ヲ形成ス

第百三十七章（全中）

甲状軟骨ノ前面次ク下方ニ偏スル処ニ一種ノ腺アリ艾質中血脈甚タ多ク次壮ノ人ニ於テハ黄色ノ汁液充盈スルヲ押泌腺（シキルドル）ト名ク

第百三十八章（全下）

気管ハ喉頭下端ヨリ始テ下方ニ行ク者ニメ艾頚十七或ハ二十個ノ輪状軟骨相連テ成リ艾各軟骨ハ皆輪状ニ後部離閉セリ艾内面周有ノ膜是即喉頭内膜ノ延展セル者

心被ハレ又各輪ノ互ニ接スル処及ヒ後部ノ離
開スル処ハ勁織維有テ能ク之ヲ結着ス此管
胞膣内ニ於テ分テ二個ノ枝トナリ両肺ニ入テ
枝極漸次ニ捐分レ終ニ唯膜状ノ細管トナリ又
蜂窠状質内ニ終ル

(注)気管ノ右枝ハ通例左枝ニ比スルニ稍短ノ
寛

例

例百三十九章 例百三十八

九大気ノ呼吸ニ要用ヲ為ス所以ノ者ハ唯又中
清気節酸質ノ在ルアルニ由ル然レ𪜈又内ニ可

吸者ト不可吸者トノ能ク相混合スルニ由テ以
テ入能ク又生命ヲ保続スルヿヲ得ル者ニ而メ
又成分合和ハ大概酸気百分ノ二十七度ニ居リ窒
気百分ノ七十三ニ居リ炭酸気百分一或ハ二ニ
居ル入ノ呼吸スルヤ気ノ酸質ヲ奪テ此レニ代
ルニ炭酸気ヲ呼出ス故ニ一タヒ呼出スル処ノ
気ハ再吸入ニ用ヲ為サス

(注)人ノ呼吸スルヤ気中酸質次キモ百分ノ二
十アルヿヲ要スト雖之ヲ減メ七百分一乃至
八百分一ニモ至ラシムルヿヲ得ル此時ニ至

テハ呼吸雖渋メ促追シ終ニ全ク塞スルニ
至ル者ナリ

第百四十章

吸息ハ即大気ヲ肺中ニ引クノ機動ニメ横膈ノ
低下ト肋間内外筋内外共動ヲノ運動トニ由テ
深息ニ於テハ尚其他胸腔内ニ運動ス胸腔ノ張濶スル
在ル諸筋此カ為ニ
ヨリ起ル其張濶スル由ルヤ外部ノ気内部ヨリ
気ト平均セシカ為ニ弾力ヲ以テ気管ヨリ肺ノ
蜂窠質内ニ壓入シ由テ蜂窠質ノ膨脹スルカ為
ニ状ニ絡ヘル血脈延長メ其曲折延ヒ血行流利
甚タ容易ナルヲ得ル

第百四十一章

呼息ハ其機動一分ハ横膈ノ弛後メ本位ニ復ル
即チ上部ニ及ス肋間筋ノ運動休止スル
カ為ニ肋骨自固ノ弾力ヲ以テ本位ニ復スルニ
由リ又気管枝及ヒ蜂窠質ノ弾力ト腹筋ノ運動
トニ由ル者ニメ其強キ吸息ニ於テハ又脊筋ノ
運ニ由ル　凡ソ呼息ニ由テハ肺中ノ気皆之ヲ
排出シ尽ス者ニ非ス故ニ已ニ一タヒ呼吸スル
処ノ人ノ肺ハ水中ニ投スルニ必ス浮ヒ未生ノ

児ニ於ケルト必ス沉ム焚レ氏艾排出スル処ノ
着甚タ多シ故ニ血管聚縮ノ曲折シ由シ又テ心
ノ後室ニ皈流スル処ノ血行進メラレ心ノ前室
ヨリ来ル処ノ血行妨ケラル

第百四十二章

呼吸ノ用ハ最大緊要ニメ缺クヘカラサル1ハ
艾機動能ク意ニ隨フト雖モ悉ク氏唯皈シ唯呼スル1
ノ成シ難キヲ以テ著明ナリ焚氏艾機動ハ又意
ニ隨ハスメ成ルヿヲ得ル為ニ艾理ヲ了解スル
1難シ憶フニ恐ラクハ脳ノ運動ト呼皈ト原来
固有ノ合致ヲ有スル者ナラシ

第百四十三章

呼吸ノ主用ハ血液ヲシメ肺中ニ於テ生気ト合セ
シメ艾中含ム処ノ炭質ヲ排除セシムニ在リ由
テ以血液艾色ヲ増スヿ得ル

㊟呼吸第一ノ主用ハ治体ノ温煖ヲ発セシム
ルニ在ル者ナリ

第百四十四章

初生児ノ始テ吸息スル者ハ艾体中ニ慮スル処
ノ非常ノ刺戟按ニ落気ニ於ケル対抗ヨリメ胸

腔ノ澗張スルニ由テ発起スル者ナリ

第百四十五章

呼吸ノ劇甚ナル状種々アリ即チ大息ト云欠気ト云「キュンヘン」ト云呃逆ト云咳嗽ト云噴ト云嚏ト云ヲ見ナリ

第百四十六章

呼吸ノ用タル已ニ百四十三章ニ説示セル処ノ者ノ外尚種々アリ又一肺ヨリ糞気ヲ発セシメ又二中膈ヲ為ス者アリ按ニ横膈膜動ホ又内ニ於ル血液及ニ乳糜ノ運動ヲ進メ大便ノ排泄ヲ佐ケ又三吸息ニ由テ吸飲及ヒ臭ヲ成サシメ又四吸息ニ由テ声音ヲ発セシムルホ是ナ

第百十七章

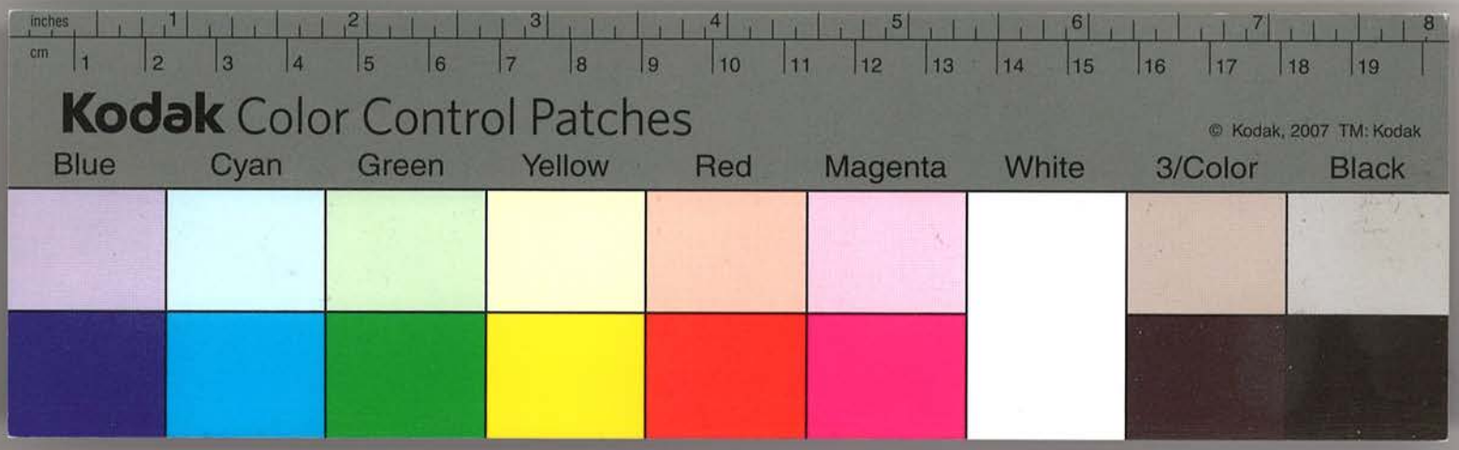
声音ハ大気ノ喉孔隙間ヲ通メ喉隙軟帯ニ觸ルヽヨリ発スル響ニメ又発スルヤ唯喉孔隙ノ寛窄ニモ由ラス又特ニ又軟帯ノ弛張ニモ由ラス唯両器ノ動ノ相合和スルモノヽ而メ又機動タル喉頭所有ノ諸筋ニ由テ随意ニ発スル者ニメ又声音ノ強弱ハ唯喉及ヒ肺ノ大小ト喉腔ニ触ル、気ノ力ノ強弱ニ関係ス　唱音ヤ或ハ之ヲ

鳥ノ囀声ニ比スル者アリト雖モ其別大ニ差フル者ニメ是レ悉次整列ニ相交換スル響音ヨリ発スル者ニ甲状腺ハ尚他ノ喉頭及ヒ気管ニ於ケル諸腺ト同ク其部ノ内面ヲ滑沢ナラシムルヿヲ主ル

第百四十八章

言語ハ声音ノ諸運動ニ由テ文字ノ形成ヲ得ル者ニメ思想ヲ外ニ発スルノ要媒ナリ言語ヨリ成セル文字ノ音ニ三種ノ別アリ一ヲ弾音トゾモリンケル云ヒ一ヲ洋音ト云ヒ一ヲ夜音トメテ云フ

中津藩 小幡彌也


inches
cm
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black